

大学

2024 年度
「卒業生満足度調査結果の検討」

大学院

2024 年度
「修了生満足度調査結果の検討」

大阪電気通信大学

教育開発推進センター

Center for Educational Development(CED)

目次

大学

大学全体：集計結果.....	3
2024 年度「卒業生満足度調査結果の検討」	5
工学部	
電気電子工学科	6
電子機械工学科	10
機械工学科	12
基礎理工学科	14
環境科学科	15
建築学科	17
情報通信工学部	
情報工学科	18
通信工学科	20
医療健康科学部	
医療科学科	21
理学療法学科	24
健康スポーツ科学科	25
総合情報学部	
デジタルゲーム学科	27
ゲーム&メディア学科	28
情報学科	30
共通教育機構	
人間科学教育研究センター	31
英語教育研究センター	35
数理科学教育研究センター	37

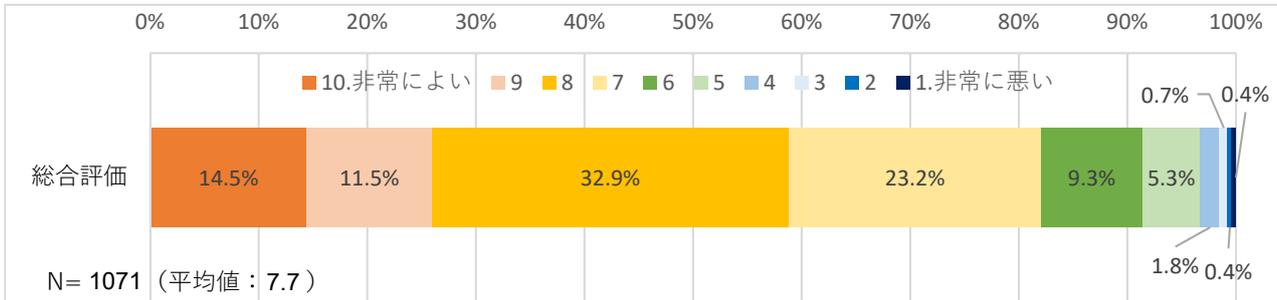
大学院

大学院全体：集計結果.....	40
2024 年度「修了生満足度調査結果の検討」	42
大学院 工学研究科	
先端理工学コース	43
電子通信工学コース	44
制御機械工学コース	46
情報工学コース	47
建築学コース	48
大学院 総合情報学研究科	
デジタルアート・アニメーション学コース	49
デジタルゲーム学コース	50
コンピュータサイエンスコース	51
大学院 医療福祉工学研究科	
医療福祉工学専攻	52

2024年度 卒業生満足度調査

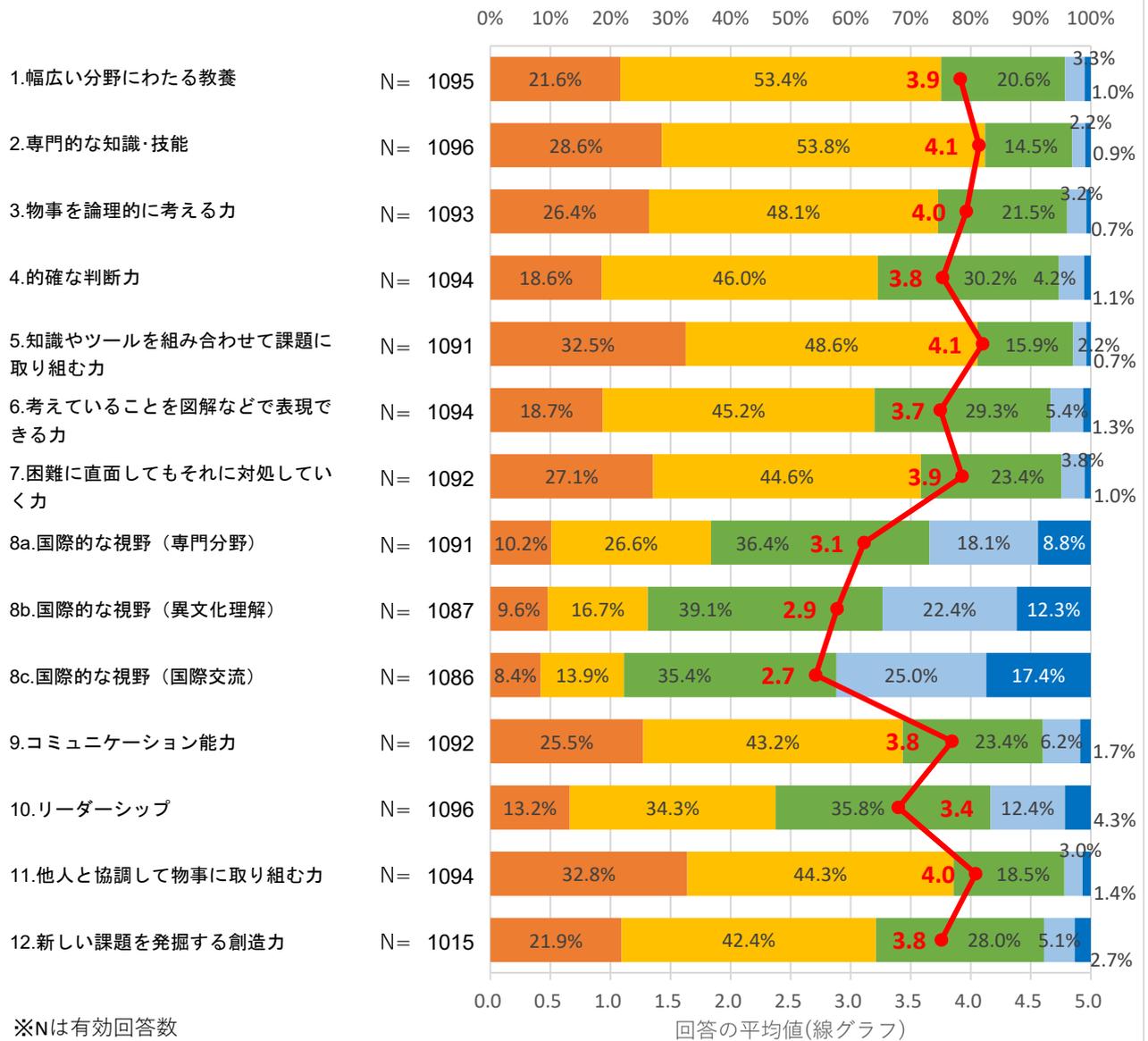
大学全体：集計結果

◆あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。



■5.十分獲得した ■4.ある程度獲得した ■3.どちらとも言えない ■2.あまり獲得していない ■1.獲得していない

選択肢別の割合(棒グラフ)



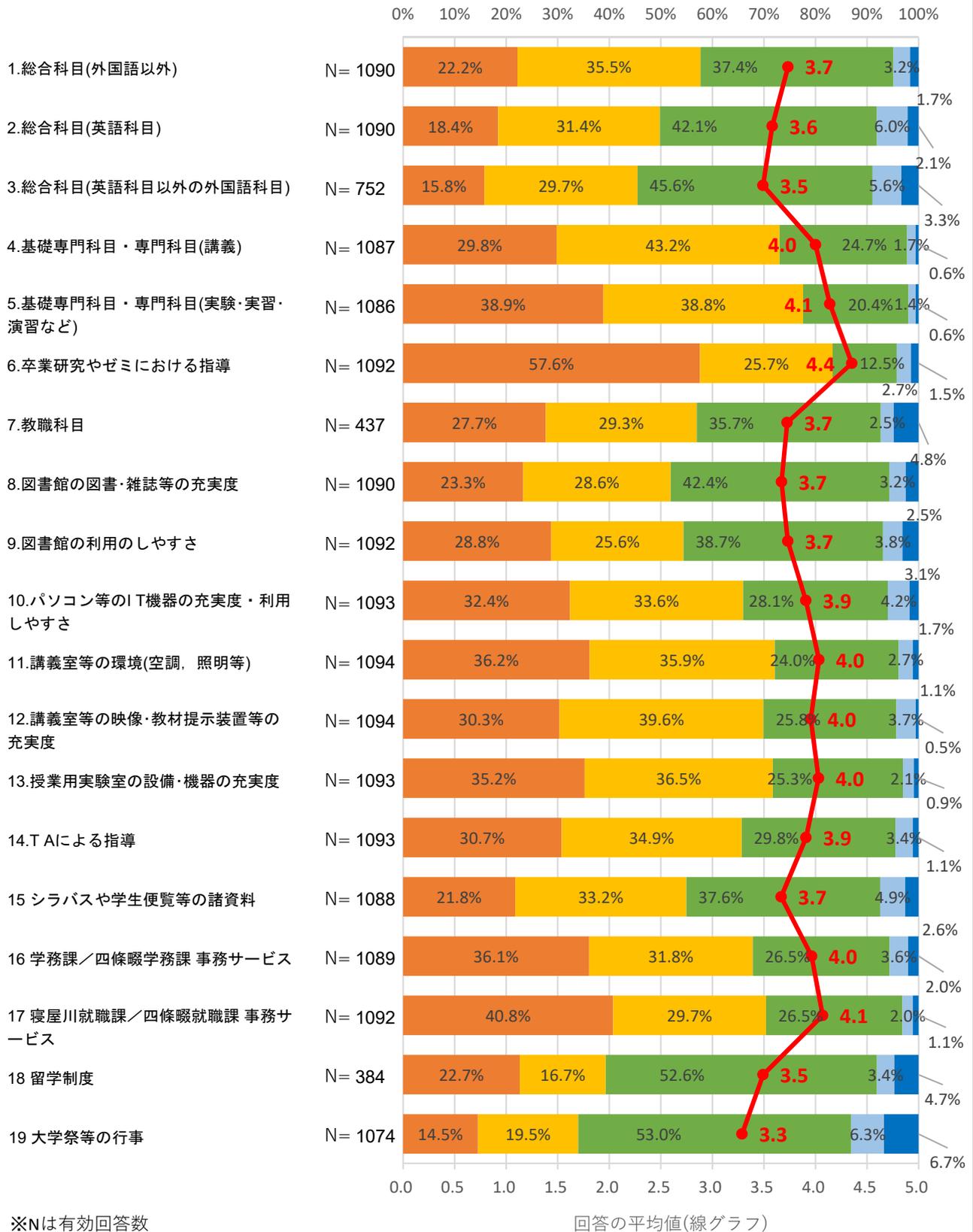
2024年度 卒業生満足度調査

大学全体：集計結果

◆本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

■ 5.よかった ■ 4.ややよかった ■ 3.ふつう ■ 2.やや悪かった ■ 1.悪かった

選択肢別の割合(棒グラフ)



大学

2024 年度

「卒業生満足度調査結果の検討」

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 4 日
工学部電気電子工学科
2024 年度主任 富岡 明宏

設問ごとに回答を整理し、検討した結果を以下に示す。

選択式設問

[A] 本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

すべての項目について、昨年度を上回るもしくは同等のポイントとなった。とくに、電気電子工学科の教育で修得してもらいたいと考えていた、
「専門的な知識・技能」
「物事を論理的に考える力」
「知識やツールを組み合わせ課題に取り組む力」
「困難に直面してもそれに対処していく力」
に対して、高い評価を得られたことは、学科での取り組みが功を奏したと考える。さらに、
「他人と協調して物事に取り組む力」
に対しても昨年度以上に高い評価を得られたのは、キャリア科目にも力を入れて学生の就職力を向上させる本学科の教育方針が学生に浸透していることを示している。これは今年度の就職率が 97%と例年以上に高い値を記録したこととも対応している。今後も、しっかりと教育していくつもりである。

他方、
「国際的な視野」
「リーダーシップ」
に関しては他の項目と比べてこれまであきらかに評価が低かったが、今回は改善が見られた。前者については 1 年次のキャリア科目の中で英語を使った技術表現や英語グラフを読み解く力の実習などを行っていることなどが、効果を挙げたと考えられる。今後は、より踏み込んで英語で AI を利用するなど、英語発信する実習などを検討する必要があるだろう。またキャリア科目群で「リーダーシップ」を引き出す実習も継続して行なっていることが、「獲得度」という指標で効果が現れ始め、学生の自己肯定感も向上した、という結果になっている。プロジェクト活動科目等を通じて、学生自らが積極的に行動するよう誘導する手法が有効性を示したと考える。

[B] 本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

大学教育で最も重要である「卒業研究やゼミにおける指導」に対する評価は、一昨年より改善されていた昨年度とほぼ同じ水準を維持できた。コロナから回復し、研究室に出てきて行う卒業研究が実質的に積極化している表れであろう。今後もしっかりと卒業研究を指導する必要があることを実感した。

また、
「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」
「授業用実験室の設備・機器の充実度」
も、改善されていた昨年度と同じ水準を維持でき、高く評価されている。学生が専門科目の重要性を理解し、それに応えられる教育が行えていることが分かる。今後も専門科目の教育を充実し、社会のニーズに応えられる教育をしていく。

他方、
「TA による指導」
の評価はやや低く、これはコロナの影響で 1 年次から遠隔授業が主だった結果と考えられる。現在は対面授業を中心にを行い、TA による丁寧な個別指導を受けられるので、年齢の近い TA が学生目線から受講生の質問・疑問に直接答えられるようになっているので、今後のアンケートでは改善されると期待でき

る。

[C] あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。

設問[A]、[B]の合計平均は昨年度とほぼ同じであり、その結果、全体としての評価である設問[C]の平均も昨年度とほぼ同じである。教育に関する満足度を上げるため、以下各項目に関して検討する。

自由記述設問[D]

学位記授与式において、十分に時間を取ってこの欄を記載してもらった。下級生の大学生活を良くする効果があるので自由記述も多く意見を積極的に書いてほしい、と促した結果、例年以上に186件(B 3件、D 58件、E 40件、F 56件、G 29件)の記述回答が得られた。実質的な大学での学びについて突っ込んだ意見が得られて、教員側も広く受け止めて今後の改善に生かしたい。内容が多岐にわたるので、いくつかの問題点に整理して、今後の対応を記載する。

満足している点

1. 獲得した知識や能力について

「専門的な知識を更に知れたのと、勉学を聞きにいったら丁寧に教えて頂いた」「電気について専門的な知識を持っている教員が多くいるので適切に教えていただけた」、「ハードウェア、ソフトウェア、その他言語系など様々な知識を身につけることができ、就職にとっても役立った」、「サークルや活動(授業以外の)が豊かで、そこから身についたものが多い」など大阪電気通信大学独自の学びを称賛する声が多数。

→単に基礎事項を記憶・学習するだけで終わりではない。学んだことを、自らの将来にどう役立てるかという実践的な観点から、自分の総合力・応用力を高め、より高い段階をめざす視点が素晴らしい。

2. 教育設備・機器などについて

「専門的な機器や設備が充実しており、多くの知識を身に付けることができた」、「専門分野の知識を得ることができた」、「幅広い専門科目が学べる。基板加工機やアクリル板加工機などの設備が利用できる」、「設備が揃っているところ。基板加工機、3D造形センタ等・教室のモニター等」など、大阪電気通信大学の設備を称賛する声も多数挙がっている。

→上位の大学に期待される充実した設備が本学に存在すると認め、学生の勉学・研究活動を有効に支え、有益な学園生活を送れたことが示唆されている。

3. 教育指導に関する項目

「教員に質問しやすく、勉学がしやすかった」、「卒業研究では先輩の適切な指導をいただけた点が私にとってはスムーズにものごとが進みとても良かった」、「資格の支援の手厚さや、実験機器が充実しており、他大学と比べてより専門的な勉学を行う事ができる」、「卒業研究の教員の指導方法が非常に良かった」、「勉強においてTAなどの人がわからない所を教えてもらえる」、「分野ごとに専門の教員がいて、とても適切な指導をいただいたので、より深く学ぶことができた」、「1～2年次に実験サポート課でレポートの書き方などを指導していただけた」

→TAの対応や授業時間外でのサポートに対する感謝が多く、今後も継続して学生の質向上をはかってゆきたい。

4. 学務・就職関係

「就職に関する制度が整っていて非常に助けられた」、「就職活動への支援が充実している。ゼミでの指導が適切なものであった」、「就職活動に早くから取り組むことができ、早めに就職が決まった」、「講義の種類が多く、幅広い分野の知識を身につけることができた点。就職活動で強味としてアピールすることができた」

→本学の手厚い就職活動に関してのサポートを評価し、感謝する声が多い。

5. その他

「図書館の本数（が多い）」、「図書館ネットサービスで本を借りれるのは非常に助かった」、「実験でのサポートの手厚さ」、「資格の補習がしっかりしていて分かりやすかった」、「基礎科目がしっかりしていた。実験も多く、大変だったがよかった。就活にも力を入れていて良かった」、「学外活動が充実している点。学科・学部・学年に関わらず、（多くの人と）接することができた」、「電気、機械、ITなどの私がイメージしていた理系の分野が強くてとても良かった。また、就職にも強く、就職活動で困ったことは無かった」

→本学に在籍することで自己実現ができる点は、本学の大きなメリットとして今後も宣伝して行きたい。

満足できなかった点

1. 情報伝達に関する項目

「履修や単位について分かりにくい所が多々ある。また、教職生への連絡が少ない。多岐に亘り予定が決まるのがギリギリ」、「学校の授業の教室についてたけど、電車の遅延などで急に授業がなくなった時の情報伝達を早くしてほしい」、「全体的に連絡が遅く感じたり、重要な内容が伝達されていないことがあった。」

→例年出てくる要望であり、少しずつでも改善をお願いしたい。

2. オンラインでの連絡事項

「情報が My Portal からしか得られないこともあるので、情報伝達の方法を増やしてほしい。」

→事務手続きオンライン化の進展・合理化について、点検が必要かもしれない。

「大学の Wi-Fi がつながらなくなって出席確認ができなくなったりする」、「Wi-Fi が弱く、授業で使えない時があったので改善すべきだと思う」

→こちらも改善をお願いしたい。

3. 授業に関する項目

「実験科目以外にも創生演習のような手を動かしてモノづくりを行う機会が必要だと思う。座学だけでは身につかない。生徒の自主性に任せるのもよいが、自主性だけではどうにもならないこともある。」

→創生演習は少しずつ履修者が増加している。現在は異分野協働エンジニアリングと併せて2科目あり、希望する方たちには好評で、希望には添えていると思う。

「パワーポイントを扱う授業で、授業スライドを後で確認できるようにしてほしい。黒板を扱う授業でスマホで黒板を撮影する時間がほしい」、「moodle が一年で昨年のデータが見れなくなる」、「仕方ない点もあるが、1、2年時の講義がかなり詰まっているので、ゆとりがあった方がいいかもしれない」

→moodle を使った改善策は講じたい。講義が詰まっている点は教員側も認識している。工学科への再編とともに改善策を考えたい。

4. その他

「学年上下間の交流が少ないので、交流の機会が増えてほしい」

「サークルに入っていない人は学年の上下関係の関わりがなかったので、関わる機会があった方がいいと思った」

「生徒全員が自由工房と同等の技術を得られると大阪電通大は今よりはるかに電気に強い大学になれると思いました。」

「自由度（あそびではなく）を上げてほしい。良くも悪くも高専の様な活動であった。」

→コロナ解消とともに、（課外も含めて）学生の活動が活発になっていることはすばらしいことである。学生さん方の希望に応じて行きたい。

「講義で使う施設や器具の新調」、「整備されていない備品が汚く使いづらかった」

→他方で「整備されている備品がきれいで使いやすかった」という意見もあり、どのような見直しがされているか、1年に1回でも学務課・施設課などが協力して、機器更新を oecu メールなどで全学に発信するのはどうか？学外にPRすることも必要であろうが、これらの情報を学内にメール発信するだけで学生・教職員の満足度を上げることができるのではないか。

「売店や食事の場をもっと充実させてほしい」、「体育館のボールなどの備品を使えるようにして欲しかった」、「図書室、木工室等の便利な施設があるのにあまり周知されていない」、「J号館の机、イスが小さく、ヒザが痛くなることがあった。」

→体育館のボールなどの備品は、可能な範囲で貸出できる体制になっているはず。他の施設の利用方法の案内も含めて、学務課から発信していただけると助かる。

全体を通して、今回の卒業生満足度調査での意見を参考に、改善策を検討していく予定である。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 27 日
工学部 電子機械工学科
2024 年度主任 入部 正継

[A] 本学での大学生活をとおして、得た知識や能力

全体での合計平均では 2023 年度と比較して-0.1 ポイントとなった。2023年度と比較してポイントが下がったのは

- 7 困難に直面してもそれに対処していく力 3.9(-0.1)
- 8a 国際的な視野(専門分野) 3.0(-0.2)
- 8c 国際的な視野(国際交流) 2.5(-0.1)
- 10 リーダーシップ 3.2(-0.1)

であり、-0.1~-0.2 ポイントの下落となった。一方、ポイントが増えた項目は

- 8b 国際的な視野:異分野理解 2.7(+0.1)

であり、残りの10 項目は 2023 年度と同ポイントであった。4.0 ポイント以上の高評価については 2023 年度は6項目であったが、2023 年度は5項目となり1項目減っている。以下に5項目を記す。

- 1 幅広い分野にわたる教養 4.0(±0.0)
- 2 専門的な知識・技能 4.2(±0.0)
- 3 物事を論理的に考える力 4.0(±0.0)
- 5 知識やツールを組み合わせる力 4.1(±0.0)
- 11 他人と協調して物事に取り組む力 4.1(±0.0)

以上より、例年と同様に国際的な視野についてポイントが低いことが特徴的であることと、学修効果についてはポイントが高い傾向にあることが分かる。

[B] 本学での生活を振り返り、授業科目群や教育設備・機器

全体的には 2023 年度と比較して+0.2 ポイントとなった。4.0 ポイント以上の高評価については 2023 年度は 6 項目であったが、2024 年度は 11 項目に増加している。専門科目に関連する項目では、

- 4 基礎専門科目・専門科目(講義) 4.1(+0.1)
- 5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など) 4.4(+0.1)
- 6 卒業研究やゼミにおける指導 4.3(+0.1)

のポイントが高くなっている。設備に関する項目では全てが+0.1~+0.3 となっており、4.0 ポイント以上の項目は、

- 9 図書館の利用のしやすさ 4.0(+0.1)
- 10 パソコン等の IT 機器の充実度・利用しやすさ 4.1(+0.1)
- 11 講義室等の環境(空調,照明等) 4.2(+0.2)
- 12 講義室等の映像・教材提示装置等の充実度 1.0(+0.1)
- 13 授業用実験室の設備・機器の充実度 4.2(+0.1)
- 14 TA による指導 4.0(+0.1)

となっている。事務に関する項目では、全てが 0~+0.6 と大幅増となっており、4.0 ポイント以上の項目は

- 16 学務課/四条畷学務課 事務サービス 4.0(+0.4)
- 17 寝屋川就職課/四條畷就職課 事務サービス 4.3(+0.6)

となっている。

以上より、2024年度は講義や専門科目だけでなく、事務支援に関しても高いポイントがついていることが分かる。

[C] 本学で経験した教育についての総合評価

2023 年度に比較して+0.4 の 7.9 ポイントとなった。総合評価で6以下と評価した人数が 79 名中の 10 名(全体の 13%)に対して、総合評価で 7 以上とした人数は 69 名(全体の 87%)であることより、満足度が高い学生の数が多いことが分かる。

【総評】

2024 年度卒業生は 2021 年度の入学者が大半を占める学年であり、Covid-19 の感染拡大の影響を少なからず受けた学年である。学部1年次の授業を遠隔授業に対応せざるを得ない状況であったが、[B]のアンケート回答にもあるように学生には安心して学修できる環境を提供できたと考えられる。

自由回答欄から読み取れる内容としては、研究室の同級生・先輩・教員とのコミュニケーションが良好であること、実験サポート課(工作室・3D センタ等)の支援が有難かったこと等が多く、本学の教育環境が十分に機能していることが確認できた。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 3 日

工学部 機械工学科

2024 年度主任 井岡 誠司

[A] 学生が獲得した知識・能力に関する項目について

学生が獲得した知識・能力に関する項目は「的確な判断力」が3.5であり、「幅広い分野にわたる教養」、「専門的な知識・技能」、「物事を論理的に考える力」「知識やツールを組み合わせる力」、「課題に取り組む力」、「考えていることを図解などで表現できる力」、「困難に直面してもそれに対処していく力」は3.7から4.1の間の高い数値であり、「専門的な知識・能力」をある程度獲得したと考えた学生が多かったと思われる。講義・実習・卒業研究を通じて学生の社会人基礎力獲得を目指す学科教員の取り組みが成果として表れたものと考えられる。他者との協調や課題発掘能力に関する能力に関しては「リーダーシップ」の3.4以外は3.7から4.1と高い平均値になっており、プロジェクト型教育や卒業研究等、他者との関わりの中で実施される教育の成果が表れたものとする。以上の項目については、今後もより高い満足度を得られるように教育、研究への取り組みを続けていくことが重要である。

「国際的な視野」については「あまり獲得していない」「獲得していない」の回答をした人の数が他の項目に比べて明らかに多い。この傾向は機械工学科だけのものではなく工学部全体でも同様の傾向が見られる。これは、工学部には留学生が少なく外国人との交流がほとんどないことが学生の評価に現れていると考えられる。学科単独で解決できる問題ではないが、国際的視野や外国語によるコミュニケーション能力は多くの企業でも求められていることであり、専門科目や卒業研究を通じ、学科としても外国語に触れる機会を増やす方法を検討したい。

[B] 授業科目群、教育設備・機器に関する項目について

専門教育の授業についての評価を見ると、「基礎専門科目・専門科目(講義)」が3.8、「基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」が4.2、「卒業研究やゼミにおける指導」が4.4といずれも高い平均値であり、昨年度とほぼ同じ数値となっている。専門教育について各教員が実施している丁寧な指導が効果を発揮した結果であると考えられる。実験・実習科目、卒研・ゼミに対する満足度が高くなっており、例年の傾向ではあるが、自由記述から機械工学科の多くの学生が、実験・実習や卒業研究で手を動かすことに興味を持っていることが確認できる。実験・実習系授業については効果的な授業方法の検討をこれまでと変わらず続けることが重要と考えられる。なお、授業時間が105分になった点についての意見は「本学で改善すべき点」に3件のみであったが、これは今回の満足度調査に回答した学生が4年生になった時点で105分授業に移行したため、105分授業を受けていない学生が多いためであると考えられる。105分授業に対する学生の意見は次年度以降の調査を待つ必要がある。

設備関連では「図書館関係」、「パソコン等のIT機器の充実度・利用しやすさ」「講義室関係」ともに若干の上下はあるものの昨年度と同等の満足度となっている。自由記述では食堂についての改善要望がいくつか見られた(もっと広くしてほしい。など) 昼休みが短くなったことで食堂が混雑しているためだと思われるが、何らかの対策が必要と考える。昨年度まで自由記述に多く見られた研究室、学生ラウンジへの改善要望は、今年度は「本学で改善すべき点」「大学への要望、提案」でそれぞれ1件ずつとなっていた。2024年度の卒業生には研究室・学生ラウンジに不満を感じる人は少なかったようではあるが、これが今年度だけなのかどうか、来年度以降も継続して見ていく必要がある。

事務サービスについては、昨年度に比べて評価が上昇しており、丁寧な対応を頂いた職員の皆様に感謝したい。

[C] 総合評価について

総合評価は7.3であり、2023年度と同じ数値であるが工学部平均の7.7よりも低い数値となった。学科

全体で評価結果と自由記述の内容を検討し、教育への取り組みの改善を引き続き図って、学生の満足度を高められるように努めていきたい。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 30 日

工学部 基礎理工学科

2024 年度主任 森田 成昭

本学科の特徴は、工学の基盤となる科学(数学・物理・化学)の専門知識を獲得させ、それらを活かす理論や技法を修得させる教育を実践していることである。これにより、物事を「根っこ」から追求・分析する基礎力と真の応用力を持ち、先端科学技術から教育まで、幅広い舞台で活躍できる理数系ジェネラリストを育成している。

2024 年度卒業生満足度調査において、[A] 知能や能力の獲得(5 段階評価)、[B] 授業科目や教育設備・器機(5 段階評価)、[C] 総合評価(10 段階評価)の 3 項目が数値的に評価された。2023 年度、及び 2024 年度における調査結果の平均を、全学、及び工学部と比較して表 1 にまとめた。2024 年度におけるこれら 3 項目の評価は、全学、及び工学部と比較して同点か若干低い傾向にあるものの、本学科内で比較すると、2023 年度から 2024 年度の変化として、[B] 授業科目や教育設備・器機は同点であるものの、[A] 知識や能力の獲得、[C] 総合評価の 2 項目がそれぞれ高評価となった。

2023 年度卒業生の大半は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のまん延による緊急事態措置が始まった 2020 年 4 月に入学しており、情報通信技術(ICT)を活用した教育の導入など、全国的に教育システムの転換が求められた時期に初年度教育を受けている。これに対して 2024 年度卒業生の大半は教育現場の混乱が収まりつつあった 2021 年 4 月に入学しており、相対的に前年度卒業生と比較して、満足できる大学生活を送ることができたのではないかと考える。

表 1. 卒業生満足度調査のまとめ

	2023 年度			2024 年度		
	全学	工学部	本学科	全学	工学部	本学科
[A] 知識や能力の獲得	3.6	3.6	3.4	3.7	3.7	3.6
[B] 授業科目や教育設備・器機	3.7	3.7	3.8	3.8	3.9	3.8
[C] 総合評価	7.5	7.4	6.9	7.7	7.7	7.5

調査結果をさらにみると、[B5] 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)(4.2)、[B6] 卒業研究やゼミにおける指導の評価(4.5)といった項目が全学平均や工学部平均と比較して高く評価され、逆に [A2] 専門的な知識・技能(3.9)、[A8c] 国際的な視野(国際交流)(2.6)といった項目の評価が低かった。これらの傾向は、工学の基盤となる基礎力をしっかりと身に付けさせた上で、幅広い舞台で活躍できる理数系ジェネラリストを育成するという学科の教育方針と合致しており、工学における特定の専門分野のスペシャリストを育成する他学科と比較して、専門的な知識・技能が得られなかったという評価に繋がっているのかもしれないが、逆に、特定の専門分野に偏らない、幅広い工学の基礎力を与えることができたのではないかと考えられる。

本学科では 1 年前期の科目である「基礎理工学入門」において、チームでのものづくりを体験させる「卵落としコンテスト」を実施しており、また、「アクティブサイエンスゼミナール 1・2」において 2 年生と 3 年生を連携させた少人数ゼミを開講している。例えば報告者の少人数ゼミでは受講者十数名の中で学年横断的に 3-4 名のチームを組ませ、データサイエンスコンペティションのひとつである SIGNATE に挑戦させている。このような実験・実習・演習科目や少人数ゼミによるきめ細かい教育が満足度に繋がっており、本学科の卒業生の特徴になっていると考えられる。なお、本学科の 2024 年度卒業生における進路決定率は 100%であった。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 20 日
工学部 環境科学科
2024 年度主任 榎本 博行

1. はじめに

2024 年度の卒業生は、コロナ禍 2 年目に入学し、一部の授業で遠隔授業を強いられた。そのため、自分が思っていたような学生生活を送れなかったと想像される。それらをふまえ、環境科学科の 2024 年度卒業生満足度調査結果について学科会議などで検討した。ここでは、その結果の概要と今後の満足度向上のための対策について報告する。

2. 環境科学科の調査結果の概要

大学全体および工学部全体、環境科学科 2024、2023、2022、2021 年度のそれぞれの結果を表1にまとめた。各項目の評価は大学全体や工学部の平均レベルより 0.1~0.4 ポイント高かった。

表 1. 獲得数値の合計のまとめ

	全体 (2024)	工学部 (2024)	U (2024)	U (2023)	U (2022)	U (2021)
[A] 知識・能力の獲得	3.7	3.7	3.8	3.6	3.6	3.5
[B] 授業科目群や教育設備・ 機器など	3.8	3.9	4.1	3.8	3.8	3.7
[C] 総合評価	7.7	7.7	8.1	7.4	7.6	7.3

[A] 知識・能力の獲得

知識・能力の獲得については、ここ数年、大きく変化していなかったが、今年度は高いポイントを示した。

大学全体や工学部と比較して低いポイントとなっている項目として、他人と強調して物事に取り組む力(11)や新しい課題を発掘する創造力(12)が挙げられ、コロナ禍の影響があつて思っていたような学生生活を送れなかったことが影響しているものと考えられる。

[B] 授業科目群や教育設備・機器など

授業科目群や教育設備・機器などについては、ここ数年、大きく変化していなかったが、今年度は高いポイントを示した。授業科目群で高いポイントを示している項目は、総合科目(外国語以外)(1)、卒業研究やゼミにおける指導(6)、教職科目(7)で、大学全体や工学部の平均レベルより 0.1~0.3 ポイント高かった。

事務サービスのポイントが大きく上昇しており、事務方のきめ細かい対応があつたからだと思われ、深く感謝している。

合計は 4.1 ポイントで、大学全体 3.8、工学部 3.9 から考えると、環境科学科の学生の満足度は高かったものと考えられる。

[C] 総合評価

総合評価は 8.1 であり、大学全体 7.7、工学部 7.7 から考えると、環境科学科の学生の満足度は高かったものと考えられる。自由記述欄から、卒業研究・研究室での教育に関する満足度が高く、好意的なコメントが目立っていることから、各教員の丁寧な指導が高いポイントの要因となっていると考えている。また、新棟の新しい実験室で卒業研究を行うことができたことも高いポイントの要因になっていると考えている。

3. さらなる満足度維持・向上のための対策

3.1. 新しい専攻でのカリキュラムへの準備

2019 年度より食環境と住環境とを学科の新しい柱に位置付けて学科内の改革を実施してきた。食環境に関しては、2019 年 5 月に食品衛生管理者および食品衛生監視員の養成施設として認定された。また、住

環境については、施工管理技士の指定学科として 2022 年 8 月に認定された。これらの学生の将来が見える・将来に役立つ・卒業時に資格が得られるカリキュラムにより、卒業時の満足度を上昇させてきた。

また、小中学校や高等学校において SDGs に関する取り組みが始まっている。SDGs には食環境・住環境に関する内容が盛り込まれており、本学科の新たな柱の定着には大きな追い風となっている。新入生への教育はもちろん、在校生についても SDGs に関する知識の定着をはかり、今後の持続可能な社会に貢献する人材を育てることにより社会で必要な知識を大学にて学んだ実感を与え、満足度向上につながると考えている。

2024 年度は学科再編が実際に始まり、食環境は工学部 基礎理工学科 環境化学専攻へ、住環境は建築・デザイン学部 建築学科 空間デザイン専攻へ引き継がれた。学科教員も新しい環境での仕事が増え、全員が揃って学科会議を開催するのがなかなか難しかった。

3. 2. プロジェクト等の活性化

環境科学科では、「ベリーベリープロジェクト」、「カフェラボプロジェクト」、「電池プロジェクト」などのプロジェクト型教育を推進する一方で、「地域プロジェクト活動 1・2」等の総合科目(キャリア形成群)を通じて、大学祭等と同様なイベントに関わることができるように積極的に勧めている。引き続き、このような活動を活性化させるように努力することで、全体の満足度も向上させることができると考えている。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 26 日

建築・デザイン学部 建築専攻

2024 年度主任 矢ヶ崎善太郎

■ 「満足度調査の集計結果について

- ✓ 獲得度の数値が昨年より上がっている項目が多いのは喜ぶべき結果かとは思いますが、3点代前半の数値にとどまっている項目が散見され、より積極的に改善すべきことが多くあるように感じた。特に「国際的な視野」を涵養する努力が急務であろう。学生のみでなく教員もふくめ、学外での国際的な企画への参画、他の大学との交流、海外での調査、国際的な研究、留学生の派遣と受け入れ、などに積極的に取り組む必要性があり、それがしやすい環境づくりが求められている。

■ 「自由記述」について

- ✓ 本学が標榜している教育方針が良好に実践され、学生たちがおおむね理解してくれている傾向がうかがえる。
- ✓ 「学生と教員との距離感」「教員のしたしみやすさ」「教員の多様な個性」といったことが大学生生活における重要な評価基準になっていることがわかる。ここで求められているのは過度な「むつまじさ」ではなく、臨機に応じた学生との距離感をつくり出すことかと理解したい。「一律」であることが是ではなく、学生が求める教員像を理解しながら、学生への接し方、教育指導の仕方に個性を発揮することが大切であり、それが発揮されてこそ教員同士のチームワークが形成され、学生との良好な距離感が生れるのだと思う。
- ✓ 開講年度変更や達成度評価に対する要望など、大学教育に積極的に参加してくれている様子がかげえ、頼もしく思えた。参考にすべき内容かと思う。
- ✓ 毎年繰り返される設備や研究スペースへの不満に対する対応ができおらず、早急に解消する工夫が求められている。
- ✓ 質問に「後輩への推薦の理由」の記入を求めているが、この自由記述が後輩の学生に公開される機会はどこにあるのか、明記すべきかと思う。また、教員名を記述するのであれば、学生の名前も明記することを促すべきかと思う。コミュニケーション力の向上を標榜している大学であれば、責任と自信をもって発言する態度を涵養するのも使命かと思う。絶対の条件にすることは難しいとしたら、「差し支えなければ記名する」ことくらいはあってもいいと思う。発言(特に個人名を出しての発言)にはそれなりの社会的責任があることを知ってもらう機会かと思う。

■ 添付資料

なし

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年7月4日

情報通信工学部 情報工学科

2024 年度主任 古崎 晃司

1. 総合評価の結果について

2024 年度卒業生満足度の総合的評価（項目[C]）は 10 段階の主観評価において平均評価値が 8.0 となる結果であり、昨年度（7.7）および、今年度の大学平均（7.7）よりも高い評価が得られた。コロナ禍における学業や様々な活動への制限が無くなったことに加え、その間に培われたオンライン講義を活用するノウハウ等も定着し、本学および本学科が教育および学生サービスが向上し、高いレベルで定着できていることを示している。その傾向を踏まえて、現行の学科教育の課題と改善方針を卒業生満足度調査の結果に基づいて検討した。

2. 知識・能力などの獲得について

質問項目[A]群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は平均 3.7 となり、昨年度（3.7）と同程度となっている。特に、「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」「知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」「他人と協調して物事に取り組む力」については昨年度と同じく高い獲得度の評価が得られている。さらに、「幅広い分野にわたる教養」「困難に直面してもそれに対処していく力」についても平均 4.0 の獲得度が得られ、昨年度と同程度の評価がみられた。

また、「国際的な視野（専門分野）」「国際的な視野（異文化理解）」「国際的な視野（国際交流）」についても、昨年度と同程度の獲得度となっており、コロナ禍の収束に伴い、徐々に活動の幅が広がってきた状況が定着してきたと考えられる。ただし平均評価は 2.8~3.2 と他の項目に比較して低く、今後も可能な限り国際交流に関する機会を充実させていくにより、国際的な視野を広げていくことが重要と考える。「リーダーシップ」についても昨年度と同等ではあるが他の項目に比べて低い評価（3.3）であり、リーダーシップを発揮する能力向上つなげる教育・活動の機会の増加が必要と思われる。

以上の評価結果から、本学科での卒業生の学びに関する評価は一部の項目においての改善が必要とされるものの、全体としては高い評価が定着している傾向にあり、高い水準を維持できているといえる。

自由記述の回答でも、本学科の教育に関して肯定的な評価が多く認められる。2024 年度の特徴としては、教員・TA のサポート、質問しやすい雰囲気、親身な指導、Slack や対面での相談のしやすさといった、丁寧な指導と相談のしやすさに関する意見が最も多く見られた。特に、ゼミにおける卒業研究活動での教員による指導の手厚さや、研究室の同期・先輩と共に学びを深めることができたことについて好意的なコメントが多い。卒業研究では、指導教員が卒業研究生の研究進捗状況を定期的に報告させつつ、適切な助言を与えて議論・検討の機会を設けるほか、学科全体の卒業研究発表会の予稿や口頭発表の準備、卒業論文の執筆に関しても、発表練習・添削指導を何回も綿密に指導を行ってきている。このような指導体制が有効に機能している結果が肯定的な回答につながっていると考える。また、プログラミングの講義を中心として、TA・SA の指導に対する高評価も目立っており、TA・SA が教育活動において必要な役割を担っていることがうかがえる。一方、多岐にわたる科目における教育においても肯定的な回答が目立っており、多様なニーズに本学科のカリキュラムが対応できていたことがいえる。

3. 授業科目群や教育設備・機器などの評価について

質問項目[B]群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、小計区分 B1~B7、B8~B14、B15~B19 について、それぞれの平均は {3.9、3.8、3.8} となり、2023 年度の {3.9、3.8、3.8} と比較して、全体としては同等の高評価であった。特に「基礎専門科目・専門科目（講義）」「基礎専門科目・専門科目（実験・実習・演習など）」「卒業研究やゼミにおける指導」については昨年度と同様に高い評価を維持しており、学科における教育活動に対する肯定的な評価が継続的に得られていると考える。また「留学制度」「大学祭等の行事」に関しては評価が他の項目と比べて低くなっており、特に「留学制度」については昨年度に比べて若干低くなっている。これらはコロナ禍の収束に伴い改善に向かうことを期待していたが、しばらくの中断期間があったことによる影響がまだ残っていることも考えられ、今後も状況を注視する必要があると思

われる。

4. 自由記述欄への回答について

「本学で良かった点」については、上記の「2. 知識・能力などの獲得について」でも述べたように、専門的な知識を学ぶことができたことや、研究室活動において、多くの友人や仲間ができたことを挙げた学生が非常に多く、専門教育の充実と共に、学生同士の良好な社会的なつながりを構築することが大学の満足度に寄与することがわかる。また、研究室の指導教員との関係についても、肯定的な回答が多く、大学生活を通して多様な人間関係を育むことができていることを示している。さらに、キャリア支援の手厚さ、説明会・面談などの環境など就職活動のサポートに対する高評価の回答も多く見られた。

「改善すべき点」については Wi-Fi・ネットワーク環境について、授業中の接続不良や回線速度への不満などが多く見られた。これは全学的に講義でPC等のネットワーク利用の機会が多くなったこともあり、利用状況の確認・改善の取り組みが必要であると思われる。また昨年度同様、新 A 号館の研究室環境に関する指摘を受けており、新棟における研究環境の改善が、学生満足度の向上における重要な課題であることを示している。具体的には、研究室に壁がないための騒音問題や、集中して学習や研究に取り組むことができる個室の必要性を訴えるものがあった。A 号館における騒音や他人の視線が気になるといった点、さらに研究室間での騒音に対する苦情については、普段からしばしば聞かれており、研究室に来ることにストレスを感じている学生も多く見られた。情報工学科は他学科と異なり、通行量の多い廊下に、壁のない状態で直接面している研究室が多いため、騒音や視線の問題の指摘につながっているとされる。今後、学生の卒業研究活動の環境改善のため、大学と連携して、早急に取り組む必要があると考える。

また、大学からの各種情報の周知に関する対応が不十分である指摘も多く見られた。具体的には、MyPortal、Moodle、大学ホームページなど、複数の方法で情報伝達が行われているが、情報によっては伝達手段が異なる場合や、一部の方法でのみ情報周知が行われている場合があるため、運用方法の整理が必要であるという指摘が見られる。こちらも学生が重要な情報を見落とさないためにも対応の改善が必要と考える。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 27 日
情報通信工学部 通信工学科
2024 年度主任 木原 満

通信工学科は、これからますます社会に大きな影響を与える AI、IoT、ビッグデータなどを基盤として支える 5G などの通信ネットワーク技術者の育成を目指している。そのため本学科では、その基礎となる「ブロードバンド」「インターネット」「マルチメディア」の 3 分野について、ハードウェアとソフトウェアの両面から幅広い教育を行い、ICT と IoT の世界で次世代を担う技術者を育成し続けている。

卒業生満足度調査においては、[A] 知識や能力の獲得(5 段階評価)、[B] 授業科目や教育設備・機器など(5 段階評価)、[C] 総合評価(10 段階評価)の 3 項目について調査結果が公表されている。2024 年度の調査では、通信工学科の卒業生 74 名全員からの回答が得られた。2024 年度を含む過去 7 年間の調査結果の平均値の推移を、大学全体と比較して表 1 にまとめた。全体的な傾向として、本学科は 7 年間で変動があるものの少しずつポイントが高くなっていった。しかし、2024 年度のパポイントは最も良かった 2023 年度の結果に比べ、[A]は 0.1 ポイント高くなったが、[B]は 0.1 ポイント、[C]は 0.3 ポイント低くなった。また、大学全体と比べても全体的にポイントが低くなっている。これについては、学科教員一同が学生からの評価を真摯に受け止め、卒業生の満足度がさらに高くなるような教育を目指してさらなる努力をしていく必要がある。

表 1. 卒業生満足度調査のまとめ

	大学全体 (2024)	F (2024)	F (2023)	F (2022)	F (2021)	F (2020)	F (2019)	F (2018)
[A] 知識・能力の獲得	3.7	3.6	3.5	3.3	3.5	3.5	3.4	3.3
[B] 授業科目群や教育設備・ 機器など	3.8	3.6	3.7	3.7	3.7	3.6	3.5	3.6
[C] 総合評価	7.7	7.1	7.4	7.1	7.3	7.3	6.9	6.8

個別の自由記述欄にて、評価の高かった点と改善を要望された点を以下にそれぞれまとめる。

・評価の高かった点

自由記述で多い順に以下に抽出した。最も多かったのは、教員の専門分野の広さや教育および研究室での活動であった。次に、資格取得や就職活動に満足している記述が多かった。今後も、更に満足度を高めるべく教育や研究室活動、資格と就活の支援を推進していきたい。

1. 教員の専門分野の広さや教育
2. 研究室での活動(研究室内での交流や教員による指導を含む)
3. 大学設備の充実度
4. 資格取得や就職活動とそのサポート
5. 教員の熱心な指導
6. 大学内での友人や先輩との交流

・改善を要望された点

多かった要望は、①授業方法の改善、②連絡方法の改善、③大学設備の改善であった。①授業方法の改善では、実験レポートの手書きを PC を使った記載への変更、遠隔授業やオンデマンド授業を増やしてほしい等の要望があった。②連絡方法については、卒業式・学位記授与式の開催時間の連絡がなかったこと、授業での提出物やイベントの周知を徹底して欲しいとの要望があった。③大学設備の改善では、Wi-Fi がよく切断することや MyPortal のアクセスが集中すると動かなくなる等の意見があった。その他は、教員によって授業の難易度に差があるので、分かりやすい授業への改善なども挙げられていた。これらの全ての情報を学科の教員間で共有した。

以上

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 3 日
医療健康科学部 医療科学科
2024 年度主任 日坂 真樹

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

教育目標は, カリキュラム・ポリシーの通り, 高度化・多様化する医療技術に対応できる人間力と基礎的知識・技術力について教授研究し, 医療・福祉機器の開発や医療現場において活躍できる総合医療エンジニアと高度技術に対応できる臨床工学技士を育成するために工学と医学の基礎を十分に学習させることにある. 具体的には, 医用工学系について ME 1 種および ME 2 種実力検定試験, 医療機器情報コミュニケーター MDIC, 臨床工学技士国家試験に合格させることにある.

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

- 1) 専門科目の授業改善プランを提示し, 学習環境改善を図った.
- 2) 1,2 年次に対して, 2024 年度は 7 月, 10 月および 2025 年 1 月, 4 月の計 4 回(追試験含む)の統一問題による実力試験を実施した. なお, 2 年次に対する 4 月の実力試験は対面形式で実施した. 成績優秀者に対して表彰し, 学生のモチベーション向上を図った. 基礎工学分野の成績優秀者はのべ 217 名, 医用工学分野はのべ 246 名, 基礎医学分野はのべ 366 名の 60%以上得点者を出した. これは, Moodle や試験対策アプリによる e-learning の学習時間も大きく関連している.
- 3) 医科医療事務検定三級では, 合格者は 1 年次 7 名の計 7 名であった.
- 4) 第 2 種 ME 技術実力検定試験では, 2 年次 2 名, 3 年次 3 名, 4 年次 6 名の計 11 名であった.
- 5) 医療機器情報コミュニケーター MDIC では, 3 年次 1 名の合格者があった.
- 6) 第 1 種 ME 技術実力検定試験に関しては, 4 年次 1 名の合格者があった.
- 7) 臨床工学技士国家試験に 19 名が合格し, 現役生の合格率として 93.8%を達成した.

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

例年, 教務委員および臨床実習担当教員, さらに, 卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導につとめ, 「履修の取りこぼし」防止をおこない, 学生自身が国家試験受験資格に必要な科目の履修状況を確認できるような資料を用いて, 学生自らが学修状態を把握し, それを管理できるように務めている. 新入生に対してグループ担任と対面にて面談する機会を作り, 可能な限りケアできる環境を整えた. また, 学務課から定期的に送られてくる講義の出席率も活用し, 離学対策として学科会議でも情報共有した. また, 就職指導においても, 3 年生では「就職適性論」において就職活動における基本的事項を修得させ, 4 年生では就職担当教員や卒業研究の指導教員, 就職課と連携しながら学生の状況を逐次把握し, 適切な就職指導を実行できるような環境を整えている.

4. 卒業研究指導について

本学科では卒業研究の前に「医療科学実習」「プレゼミ」「総合医療工学実習」の科目を設け, 卒業研究や技術系社会人として必要な基本的スキルを身につけさせている. これらによって, 視野を広く持たせ, 学生自身の将来の選択肢を多く持たせる工夫をしている. なお, 卒業研究配属に必要な研究室訪問も「医療科学実習」の授業内でおこない, 訪問学生に対して教員または大学院生, 学部 4 年生が個別に対応するようにしている. 卒業研究は 4 年生前期末の中間報告, 後期中期末の概要提出と口頭試験, 後期末の論文提出のすべてを満たす必要があり, それらの内容は生体医工学・福祉工学の各関連分野における調査・実験系の研究となっている. 2024 年度は学科会議で個々の学生の状況を確認し, 学科全体で卒業研究の質の維持に努めた結果, 本学科所属教員の研究室における卒業研究において, 卒業を希望する学生の不合格者はいなかった.

5. 卒業生満足度調査結果について

1) 総合評価に関する分析

教務委員および実習担当教員、さらに、卒業研究指導教員またはグループ担任を中心とした履修指導を手厚くおこない、個々の学生状況を把握できる環境を整えてきた。充実した講義や実験・実習、卒業研究を提供したため、2024年度の教育の総合評価(10段階)は前年度より0.7上昇し、7.8であった。

2) 専門分野と獲得した能力に関する分析

例年通り、臨床工学技士の国家資格取得に向けた授業を適切におこない、学科教員で尽力したこともあり、専門的な知識・技能の獲得度(5段階)は前年度の3.7から0.3上昇し、4.0となった。国際的な視野(専門分野)に関しては医療従事者である臨床工学技士の国家資格取得の軸がある一方、研究等を通じて学んだ国際的視野により、前年度より0.5上昇して、2024年度の平均値は3.0となった。

3) 授業科目および卒業研究に関する分析

卒業研究指導教員またはグループ担任からの学生状況を学科会議等で共有することにより、個々の担当者だけでなく、学科教員全体でサポートできる体制を構築している。専門教育の実習および講義の満足度評価(5段階)はそれぞれ4.1、4.0へと前年度より上昇し、講義および実習の高い評価を得ている。卒業研究やゼミにおける指導の満足度評価(5段階)も4.4と前年度より高い評価となった。卒業研究を通じて得る問題解決能力は非常に重要であるため、引き続き、学科内で卒業研究に対する取り組みをさらに充実させていく予定である。また、総合科目群の満足度評価(5段階)も例年より上昇しており、引き続き、満足度がより一層高くなるよう取り組む。

4) 自由記述に関する分析

自由記述における内容の印象に残っている科目では学科先生の科目が多く記載されており、充実した教育であったことが窺えた。講義や実習の専門性が高かった、教員の指導が丁寧であった、就職支援が手厚かったなど、個々の専任教員の授業に対する良いコメントや高い評価が多くあった。また、卒業研究で教員より熱意をもって指導を受けた、課題解決力が鍛えられた、自由な雰囲気よかったなど、卒業研究を通して、各教員が研究室の学生と信頼関係を構築していることも推察できた。

5) 教育設備に関する分析

四條畷キャンパス全体の問題と考えられるが、通学のバス、無線ネットワーク環境、事務からの案内などに対する意見が多く、学生の不満を解消させるハードウェアやシステムの改善が必要であると考えられる。

6. その他、特記事項(学科独自の教育、アクティブラーニング、離学者対策など)など

技術者としての必修であるドキュメンテーション能力の基礎を教授するために、2年次前期で「医療科学基礎実習」を開講しており、基礎的に実験を通じて、レポート作成における図表の記述、考察などの基本的な知識を低学年時から徹底させるように試みている。さらに、2年次の「電気電子工学実験」では、学生自身で経験した実験のレポート作成をおこない、さらに、3年次の「医療科学実習」「総合医療工学実習」の開講により、幅広い分野の知識を得て、4年次の「卒業研究」の中で、プレゼンテーションや卒業論文の作成を可能にするスキルが身につくように、学年の進行に伴い、学生自身でスキルアップができるようにしている。また、3年次の「生体機能代行医用機器学実習」や4年次の「生体機能代行装置学実習」では、学生自身が興味のある部分を中心に事前に調査(グループワーク)し、その結果をプレゼンすることにより、積極性を獲得させるとともに、その結果から学生の知識レベルを外部講師が確認し、実習に役立っている。このような教える側と教わる側の双方にメリットのあるアクティブラーニングを取り入れている。これより、学生自ら興味のある部分に積極的に関わることにより、授業への意欲が飛躍的に向上すると思われる。また、3年次の「ヒト型ロボット創造製作実習」では、板材から部品を金属加工により製作し、学生たちが自ら発案した二足歩行ロボットを製作するなど、実習・演習科目群は学生の自主性を重んじるように心がけている。さらに、学生中心の心電図読図の勉強会を開催し、高学年の学生が低学年の学生に教える指導もおこなっている。これについては、病院において即戦力として機能する能力であると期待される。同時に、先輩・後輩の人間関係を学び、人間形成にも役立っている。また、企業・病院に就職した卒業生が実習補助員とし

て授業に参加し, 学生(後輩)に授業内容はもちろん, 社会人としての心構えや実体験などを伝え, 学生から大変好評を得ている。

7. 添付資料
特になし。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 11 日

医療情報学部 医療情報学科・理学療法専攻

2024 年度主任 赤滝 久美

1. 設問 A「知識や能力の獲得」について

本設問では「専門的な知識・技能」「物事を論理的に考える力」「他者と協力して物事に取り組む力」において4ポイント以上の高い評価が得られた。これらは臨床実習および国家試験に向けての総合的な専門学習に注力した成果であると考えられる。

一方で「異文化理解」および「国際交流力」といった国際的な視野に関する項目は、昨年度に引き続き引き低い評価にとどまった。現代社会においては、国際的な視野や外国語によるコミュニケーション能力がますます重要になっている。今後は、専門角や卒業研究を通じて、外国語に触れる機会を増やすよう学科として取り組んでいきたい。

2. 設問 B「授業科目群や教育設備・機器について」

本設問では、全ての項目において 3.0 以上の評価が得られた。特に授業科目群では「外国語以外の総合科目」、「基礎専門科目・専門科目(講義)」、「基礎専門科目・専門科目(実験・実習)」、「卒業研究やゼミ」が高く評価され、また、教育設備と環境面では「講義室の環境」および「実験・実習設備の充実度」がいずれも 3.5 以上の評価を得た。

これらを総合的にみると、カリキュラム関係の項目(項目1~7)は平均 3.6 の評価であり、概ね満足のいく水準であると考えられる。

しかしながら、昨年度と比較すると、カリキュラムや設備については昨年度と同様であるにも関わらず、全ての項目で約 0.3~0.7 ポイントの評価低下がみられた。このことは、変化する学生のニーズに対する対応が十分でない可能性を示唆しており、今後、改善に向けた具体的な方策の検討を学科で行いたい。

3. 総合評価について

総合評価では 7.5 の好評価であり、おおむね満足感は得られていると考えられる。しかしながら、昨年度と比較すると 0.8 ポイントの低下がみられた。学科においては、この要因を十分に分析し、改善策を検討することが重要であると考えられた。

また、自由記載においても明確な学科への不満は記載されていないことから、本年度においては各講義アンケートに寄せられた意見や面談における学生の要望など、些細な意見も丁寧に拾い上げ、学科内で共有することで、学生の満足度向上に努めたい。

4. 自由記載について

自由記載に上げられた不満の多くは、通学手段に関するものである。特に、バスの積み残しや駐輪場の問題等についてである。理学療法学科においては、学休期であっても臨床実習やその準備、国試対策の取組みが実施されており、通学の不便に関する意見は日常的に聞かれている。

これらの課題については学科単位での対応は困難であることから、大学全体としての対応を切望する。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 4 日

医療健康科学部 健康スポーツ科学科

2024 年度主任 武田 ひとみ

A 総合評価及び気になる項目

1. 総合評価

本学科の総合評価平均は 7.0 であり、2023 年度の 7.6 から 0.6 ポイントと大幅に低下している。これは大学全体の 2024 年度平均 7.7 と比較しても低い水準である。また授業科目評価平均は 3.6 で 2023 年度の 3.7 から、わずかに低下している。知識や能力の獲得については大学平均と比べてどの項目も低く、知識や能力の獲得に関する満足度は高くないと言える。

2. 気になる項目

「卒業研究やゼミにおける指導」:

大学全体で最も評価が高い項目であり、本学科でもいつも比較的高い「卒業研究やゼミにおける指導」において、2023 年度の 4.3 から 2024 年度は 3.8 へと評価を大きく下げている。これは、大学全体の 2024 年度平均 4.4 と比較しても低い水準である。また、他の多くの学科がゼミ室や研究室の環境の良さを「良かった点」として挙げている中で、「ゼミ室がなかった」というコメントがあり、専門的な学習やグループワークを行うための専用スペースの不足が示唆された。ただし、これは実際にはゼミ室がないのではなく、特任教員の教員室が規定により相部屋であり、特任教員 2 名のゼミ室も共同で 2 研究室が使用していたため、一つの研究室でのゼミ室がないということであり、学生はゼミ室がないと感じていたようである。

授業科目群・教育設備・機器などに関する評価の低さ:

授業科目群・教育設備・機器などの設備に関する項目で大学全体の平均点を大きく下回っており、満足度が低いことが示唆された。

B. 自由記述内容から見た問題点

1. 情報伝達の不足と遅延:

「授業に関する情報の共有が遅い時がある」、「情報伝達が不十分だった」、「もっとメールで情報伝達をするべきである」、「マイポータルに載せるだけ」といった情報伝達に関する不満が多数見られる。これは本学科に限らず、大学全体の共通した課題として多くの学科の自由記述コメントでも指摘されている。これに関しては伝達不足ばかりとは限らず職員や教員が十分と考える一般的な伝達内方法や内容でも学生には不足と感ずることもあるようだ。

2. 交通アクセスの不便さ:

「バスを増やす」、「坂が多い」、「交通の便が良くない」、「バスの本数が少なく、乗れなかつたりする」など、交通アクセスに関する具体的な課題が複数指摘されている。毎日感じる不便さは大学生活の満足度の低下に影響が大きいと考えられる。これは本学科が所属する四條畷キャンパスの多くの学科でも同様に頻繁に指摘されているキャンパス全体の問題である。そのため大学としての改善が望まれる。

これらの要因、専門教育の質や設備・サービスに対する評価の低さ、およびアクセスや情報伝達といった大学運営に関わる基本的な部分の不満が、本学科の総合的な満足度得点を下げている可能性も無視できない。

C. 自由記述内容から見た本学科の強み

1. 実践的・専門的な学習環境:

「スポーツに特化している学科であるため、専門的な知識を得ることができた。また、実技では直接的に指導してもらえるため上達が早かった」というコメントがあり、専門分野に特化した実践的な学びの質が高く評価されている。これは、他の学科が一般的な専門知識や IT 機器の充実度を挙げる中で、本学科の明確な特色として挙げられる。

2. 課外活動の機会:

「課外活動に参加できる機会が多く、色々な体験ができた。特にマスターズ甲子園にはしっかりと取り組むことができた」と、「部活動の支援が良かった」というコメントも複数見られる。これらは本学科ならではの強みであり、他の学科で部活動やサークル活動が活発でない、あるいは参加しにくいという不満が見られる中で、本学科は

課題活動やプロジェクト、部活動への参加に関して学生たちは積極的に取り組むことができ、ポジティブな評価を得た点は学科の強みであると言える。

3.教員による個別の手厚い指導:

「遅い時間まで適切に指導していただいた」などの手厚いサポートへの感謝が示されている。また、「何事にも親身になって対応してくれた」など教員の寄り添う姿勢や親しみやすさ、質問のしやすさも評価されている。これは他の多くの学科でも同様に良い点として挙げられているが、本学科では具体的な指導内容や教員名に言及があるのが特徴的である。これらは毎年見られており、我々が学科特性として寄り添う姿勢を大事にし、きめ細やかに学生に対応してきた結果であると言える。

4.学生間の交流:

ゼミ活動や部活動を通じて、良い友人関係を築き、共に成長できたという声が多く見られた。

D.これからの対策

本学科の学生満足度向上と教育の質改善のため、特に評価が低下した項目と自由記述コメントで多く指摘された課題に焦点を当てた以下の対策が考えられる。

1.情報伝達体制の強化:

MyPortal、OECU メールだけでなく、各科目の連絡に関しては moodle のアナウンスメントも含めて重要な情報を複数ルートで発信するように努める。特に変更や緊急性の高い情報は、早期かつ複数回のリマインドを行う。

2.交通アクセスの改善:

バス運行の最適化: これは学科でできる対策ではないので大学での対策を希望するものであるが、積み残しが発生している学生の授業時間や活動時間帯(特に朝夕)に合わせたバスの増便や、卒業研究追い込み時期にあまりにも早く終了し、卒業研究に影響することが予想されるダイヤの調整を検討できることが望ましい。

3.ゼミ・研究指導体制と学習環境の改善:

ゼミ室の確保と整備:

学生が集中して議論・研究活動に取り組めるよう、ゼミ室や共同研究スペースの環境を整える。

指導の質と均質化:

「卒業研究やゼミにおける指導」の評価低下が顕著であるが、個別の意見では満足度が高い学生も存在し、具体的にその内容も書かれているため、研究室による差が大きいことが推測される。教員各自の考え方も尊重されるべきことで難しい問題だが教員間での指導方針や評価基準の共有を強化し、個々の学生にきめ細やかな指導が行き届くよう専攻会議でもこれまで以上に情報を共有する。TA の質の向上も図る。

これらの多角的な対策を実行することで、本学科の教育・学習環境が改善され、卒業生の満足度を向上させることができると考えられる。

以上

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 3 日
総合情報学部 デジタルゲーム学科
2024 年度主任 藤田 高弘

2024 年度卒業生満足度調査における総合評価（質問項目 [C]）では、デジタルゲーム学科は 10 段階評価で平均 7.7 と前年度より 0.3 ポイント上昇した。

質問項目 [A] 群「困難に直面してもそれに対処していく力」の獲得に関する質問の 0.2 ポイント上昇の他、0.1 ポイント上昇の項目も多く、質問項目 [B] 群（授業科目群や教育設備・機器などに関する質問）の評価はともに前年度と同じであったが、全体的に学科としては学びの質を維持できたと考えられる。

質問項目 [A] 群の「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか」に関する回答は、3.6 ポイントと前年度と同じであるが小項目では違いがみられる。「困難に直面してもそれに対処していく力」の獲得に関する質問では 0.2 ポイント上昇している。また前年度から継続して「専門的な知識・技能」は 4.0 ポイント、「知識やツールを組み合わせることで課題に取り組む力」「他人と協調して物事に取り組む力」は 4.2 ポイントと高評価を維持している。

「国際的な視野」に関しては、小項目の「国際的な視野」の 3 項目（専門分野）（異文化理解）（国際交流）について、すべての項目で 0.1 ポイント上昇している。以前から異文化理解や国際交流の機会を設けており、全体的に学生の意識も停滞気味であったコロナ禍の期間を過ぎた 2024 年頃からは海外への興味を持つ学生も増加傾向に転じている。

質問項目 [B] 群の「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて全体的に評価してください」に関する回答は、前年度より 0.1 ポイント上昇し 3.8 ポイントになった。授業科目群については「総合科目（外国語以外）」と（教職科目）が 0.3 ポイント上昇して、（英語科目以外の外国語科目）では 0.4 ポイント上昇する結果となり、専門科目も含めて全体的に授業に関する評価が前年度より高くなった。心理的な理由としてコロナ禍期間中のリモート中心の授業形態から面接授業の増加により、学生達に本来の授業スタイルが見直されてきたのではないかと考えている。

「卒業研究やゼミにおける指導」は 4.3 と前年度同じではあるが、学生の評価は高い数値である。

事務的なサービス等に関する質問群では「パソコンなどの IT 機器の充実度・利用しやすさ」が前年度より 0.3 ポイント上昇し 3.9 となった。これは以前からの学内ネットワークに対する不満が多かった部分であるが、機器更新などで環境整備が整ったおかげで解消されたものと考えている。

「講義室の映像・教材提示装置の充実度」は 0.2 ポイント上昇しているが、機器は更新していないため、昨年度が低かった理由は教員の持込みパソコンや機器の使い方等による不備があったのかもと推測している。また「図書館の充実度や利用しやすさ」なども全体的に 0.1 ポイント上昇しており、学内は概ね満足しているようである。

「留学制度」の評価が 0.3 ポイントと大きく上昇している点も、A 郡の「国際的な視野」と関連して 2024 年度はコロナ禍を経て、国際感覚を学びたいという意欲のある学生達が増加しつつあるのではないかと分析している。

全体的に各項目に於いて、2023 年度から 2024 年度になって社会環境全体の変化に伴い、学生達の意識も積極的かつ前向きになってきた結果が、ポイント上昇に繋がったのではないかと分析しているが現状維持ではなく、次年度に向けて更に教育内容を充実させる努力を怠らないようにすべきである。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 1 日
総合情報学部 ゲーム&メディア学科
2024 年度主任 由良 泰人

本学科の教育についての総合評価(質問項目[C])は、10 段階評価で 7.6 であり、これは、大学全体より 0.1 ポイント下回っているが、昨年度より 0.1 ポイント上回った。今後も維持向上できるように改善していきたいと考える。

1) 質問項目[A]「本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」の回答(5 段階)では、12 項目の平均が 3.7 であった。昨年度より 0.1 ポイント下回っているが、所属する総合情報学部平均より 0.1 ポイント上回っていた。昨年度よりも改善されたものは、コミュニケーション能力 4.1、他人と協調して物事に取り組む力 4.3、新しい課題を発掘する創造力 4.0 と、昨年に低かった部分を向上させることが出来たが、その反面昨年向上していた点が下降してしまった。また国際的な視野に関するものも依然まだ低くなってしまった。これらのことから、専門課程と共に国際交流におけるコミュニケーション能力の育成についても教育改善の課題があるものと受け止める。

2) 質問項目[B]「本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。」の回答(5 段階)では、19 項目の平均が昨年度と同じ 3.8 であった。昨年度より高いものは多く、かなりの改善が見られたが、図書館や事務に関するものでは低下が目立った(図書館の図書・雑誌等の充実度 3.6、図書館の利用のしやすさ 3.6、シラバスや学生便覧等の諸資料 3.5、留学制度 3.3)。これらのことから、教育環境のさらなる充実が必要と考える。また昨年度の課題であった卒業研究やゼミにおける指導は 4.4 と昨年より 0.2 ポイント上回った。今後も本学科の教育目標の完遂に向けて教員一同の一層の努力に努めたい。

3) 自由記述[D]「あなたが本学で良かったと思う点を書いてください。」での 101 件の回答を分類すると、学び・専門性がおおく、84 件(47.73%)、以下に人間関係・交流 44 件(25%)、環境・設備 36 件(20.45%)、キャリア・支援 12 件(6.82%)となった。

学び・専門性について専門的で実践的な学びが充実し、興味に合わせて自由に深められた意見が多く、人間関係・交流については、グループ活動やサークルを通して交流が深まり、仲間や教員と良い関係を築けたという意見が目立った。本学科のカリキュラムとそれらを実現させるべく邁進した教員の努力が、学生の学びに役立ったものと受け止めたい。

4) 自由記述[E]「あなたが本学で改善すべきと思う点を書いてください。」での 78 件の回答を分類すると、交通アクセス・バス関連 42 件(58%)、情報伝達・連絡体制 15 件(21%)、授業内容・カリキュラム 12 件(17%)、学内環境・設備・ネット環境 8 件(11%)、教職員の対応・指導体制 4 件(5%)であった。

昨年に対してカリキュラム・教育方針に関するものが 18.7 ポイント減少し、交通アクセス・バス関連に関するものが 38 ポイント増加する結果となった。

5) 自由記述[F]「あなたにとってとくに役に立った。あるいは印象に残っている科目名と、どういう教育内容が役に立ち、印象に残ったのか、あるいは後輩への推薦の理由などをご記入下さい。」での 136 件の回答を要約すると、学生が「役に立った・印象に残った」と感じている科目は、大きく分けて「社会プロジェクト実習(39.1%)」「プロジェクト実習(17.4%)」「映像制作実習(17.4%)」「モーションプログラミング演習

(8.7%)」「ゼミ(8.7%)」「問題解決の基礎(8.7%)」などの実践的・体験型の授業が多く挙げられている。特に「社会プロジェクト実習」は最も多くの学生が選んでおり、学外の人との関わりや実際の現場での経験、チームでの制作など、実社会で必要なスキルを身につけられる点が高く評価された。

6)自由記述[G]「あなたの現在の感想も含めて、大阪電気通信大学への要望や提案などを自由に記してください。」での50件の回答を分類すると、交通・バス・立地の問題15件(22.4%)、学内・学年間交流の不足12件(17.9%)、学びの質・教育内容に関する意見7件(10.4%)、設備・施設・環境改善要望6件(9.0%)などであった。大学としての教育システムのさらなる改善に努めていかなければならないと真摯に受け止める。

以上

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 8 日
総合情報学部 情報学科
2024 年度主任 升谷 保博

2024 年度卒業生満足度調査の結果についての検討結果を下記のように報告する。

学位授与式の日調査したが、80 人が回答しており、出席者のほとんどが回答している。

[A]本学での大学生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

2023 年度と比較して各項目の平均値にほとんど変化はない(±0.1 の範囲内)。

平均値の高い項目は、「2 専門的な知識・技能」(4.1)「3 物事を論理的に考える力」(4.1)「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」(4.2)「7 困難に直面してもそれに対処していく力」(4.0)であり、専門科目の授業や卒業研究の経験を肯定的にとらえていると判断できる。

一方、例年同様に「8 国際的な視野」の三項目の平均値は、他と比べて明らかに低い。今後のカリキュラム改変で、異文化理解や国際交流を図る科目の導入を検討したい。

また、「10 リーダーシップ」の平均値も高くない。グループワークを取り入れている授業(例えば、ディベートに取り組む「テクニカルコミュニケーション」など)で、リーダーシップを経験的に学ぶ機会を増やすようにする必要がある。

[B]本学での生活を振り返り、以下の授業科目群や教育設備・機器などについて、全体的に評価してください。

2023 年度と比較して平均値が上昇しているものは、「8 図書館の図書・雑誌等の充実度」「9 図書館の利用のしやすさ」(いずれも+0.3)である(「7 教職科目」は回答数が少ないので個々では無視する)。最近の図書館の積極的な活動が功を奏しているのだろう。一方、平均値が下降しているのは、「3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)」「6 卒業研究やゼミにおける指導」(いずれも-0.2)である。6については、2023 年度の平均値が高すぎたためではないかと思われる。

平均値の高い項目は、「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」(4.1)「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」(4.1)「6 卒業研究やゼミにおける指導」(4.1)「13 授業用実験室の設備・機器の充実度」(4.0)「14T A による指導」(4.2)「16 学務課／四條畷学務課 事務サービス」(4.1)「17 寝屋川就職課／四條畷就職課 事務サービス」(4.2)である(「7 教職科目」は回答数が少ないので個々では無視する)。専門科目、卒業研究、設備・機器の平均値が高いことは、学科の教育や適切に行われている証として素直に喜ぶたい。また、TA の指導の平均値が高いことは、TA 制度の重要性を裏付けている。

[C]あなたが本学で経験した教育について、全体として考えて、総合評価を 1～10 の 10 段階で評価してください。

2023 年度から 0.2 ポイント上昇したが、特に大きな変化とは考えていない。引き続きこのような評価を受けたい。

[自由記述]

情報学科独自の「卒業研究 3 年次制」についての記述が多く、就職活動に有利に働くことなどその趣旨を理解して好意的にとらえられていることがわかる。

また、情報系の専門知識を広く習得できたことが良かった点として挙げられており、学科の教育の方針が適切に伝わっていると判断できる。

交通アクセスの悪さ(バスの便の少なさ)、教室の電源コンセント不足が多数指摘されており、改善が望まれる。

課外活動(サークル)が少ないことや学年・学科を越えた交流機会の不足している指摘については学科としても大学としても対応が必要と思われる。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 28 日

共通教育機構／人間科学教育研究センター

2024 年度主任 佐野正彦

2024 年度の卒業生満足度調査の結果に基づき、人間科学教育研究センターに関する評価を検討する。

(1) 総合評価より

卒業生満足度調査における大学全体の教育に関する評価項目のうち、本センターが関与する項目は、次の 2 項目である。

① 総合科目（外国語以外）：評価平均 3.7

② 総合科目（英語科目以外の外国語科目）：評価平均 3.5

これに対し、学科における教育科目（専門科目）の評価は以下のとおりであり、いずれも総合科目の評価を上回っている。

③ 基礎専門科目・専門科目（講義）：評価平均 4.0

④ 基礎専門科目・専門科目（実験・実習・演習など）：評価平均 4.1

ところで、この卒業後の時点における評価に対し、授業を受講した直後に実施される評価である「学生の授業評価アンケート」では、これとは逆に、総合科目の評価は専門科目の授業評価に対して非常に高い評価となっている。このように、評価の時期や方法によって大きく異なる結果が出ることは、調査手法や信頼性に関して再検討を促すものであると考えられる（図 1 参照）。

図 1 学生満足度調査と学生授業アンケートによる総合科目の評価比較

	学生満足度調査	学生授業アンケート
1 総合科目(外国語以外)	3.7	8.3
2 総合科目(英語科目)	3.6	8.2
3 総合科目(英語科目以外の外国語科目)	3.5	7.4
4 基礎専門科目・専門科目(講義)	4.0	8.0
5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)	4.1	(寝屋川 7.7) (四条畷 8.2)

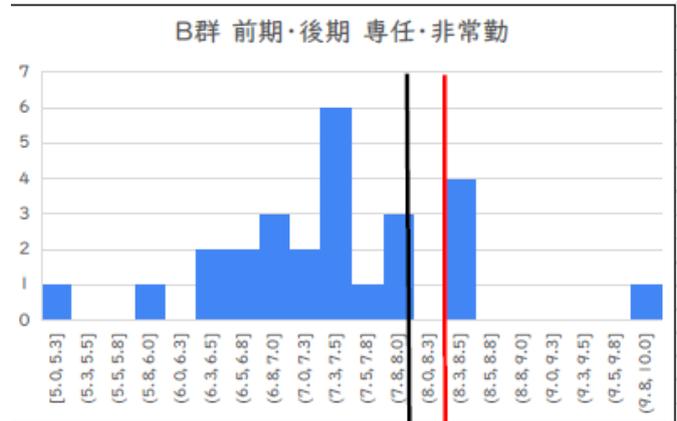
しかしながら、両調査で共通して明らかになったことは、総合科目の中で英語を除く外国語科目（具体的には中国語会話）の評価が非常に低いということであった。「学生授業評価アンケート」のデータを今少し詳しく吟味すると、総合科目内でも評価のばらつきが大きく、その中でも、人間科学教育研究

センターが担当する総合科目（共通科目）を4群に分類した領域のうち、B群（英語以外の外国語科目等）の評価が極端に低いということが分った。（それぞれの群における授業評価アンケート結果は、図2のとおりである。）

図2 総合科目内授業評価

AH	評価
全体	8.3
専任（特任を含む）	8.2
非常勤	8.4
A群	7.8
B群	7.4
C群	8.9
D群	8.5

図3 B群授業評価



これによると、総合科目全体としては高い評価を得ているものの、B群のみが全学平均を大きく下回っていることが判明した。B群は主に中国語会話の授業で構成されており、その各クラスの評価分布を図3に示すと、全学平均を上回る評価を得ているクラスはごく少数で、多くが平均を下回っている。

そこでAHセンターでは、まずは、このB群の科目の低評価の原因と対策を検討した。時間割配置を含むさまざまな側面から検討を行った結果、主なる原因として次の2要因が挙げられた。

1. クラス規模が大きすぎる：会話科目にもかかわらず、授業編成基準が70名と大規模であり、対話的な授業の妨げとなっている。
2. 授業がすべて遠隔で実施されている：対面授業と比べて、学生個々の状況把握や双方向的なやり取りが困難である。

今後の対策として：

1. **クラスサイズの抜本的縮小を大学に強く要望する。**とくに会話を中心とする語学授業では、少人数化が不可欠である。
2. **授業形式の変更：**これまで遠隔で実施していた中国語会話の授業については、早ければ2025年度後期から、遅くとも来年度（2026年度）には全面的に対面授業へ移行する方針とした。

（2）自由記述より

- 総合科目の先生が人それぞれで対応が違うので統一してほしい。授業の受け方が違い過ぎて困ることがある。
- 総合教養（安達）幅広く身の回りを学ぶことができた。
- 総合科目が講義を聞くだけのもので、私語をしている学生が複数いる。特に注意もなく講義に集中できない。もっと質疑応答などの形で学生が参加できる授業なら良かったと思う。
- 発達心理学（安達未来）心理学に興味があって、印象に残っている。

- 日本語上達法 2（松村一徳）日本語が個人的にあまり出来ないため、ここで少し日本語力が上がり役に立った。
- 英語以外の外国語の選択肢が少なすぎた。
- 総合科目の授業の内容が重複することがある。年次に分けた方がいいと思います。
- ソフトボール（金田）スポーツ分野で面白かった。
- 総合ゼミナール（松村先生）レポートの書き方、日本語の使い方を学べた。一番大切。
- 日本の近代史 江戸時代後の日本の歴史を深く学ぶことができる。
- 中国語（王少鋒）新鮮でした。

「卒業生満足度調査」の自由記述においては、ほとんどは、学部・学科の専門科目に関するもので、総合科目に関するものは、非常に少なかった。しかし、大きな問題は見られないようである。ただ、授業の進め方、方法等が多様であることに戸惑いを覚える学生もいるようだ。ただ、これらが、不用意な不統一によるものなのか、逆に、各科目の特有の内容に沿った多様性であるのかは、これらの記述からは判断できない。

なお以上の資料はすべて公開可能な資料である。

2024年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025年7月3日

共通教育機構／英語教育研究センター

2024年度主任 上垣 公明

1. 総合科目（英語科目）評価点について

2024年度の英語科目の全学評価点は3.6ポイントであり、昨年の3.5ポイントから0.1ポイント上昇した。年々、英語力の低い学生の割合が増加していることを考慮すると、英語科目担当者の日頃の取り組みの成果の一端を示すものであろう。今回のアンケートの対象は2020年度カリキュラムの英語科目を受講した学生である。同カリキュラムは2016年度カリキュラムから抜本的に変更され、英語の4技能のバランスの取れた習得や系統立てた科目の配置を念頭において作成されたものであるが、上記のポイントを勘案すると、学生からは一定の評価を得ていると考えられる。

2. 自由記述について

寝屋川について6件、四條畷について2件の記述があった。寝屋川の6件のうち4件は外国人特任講師の授業に関するものであり、全て肯定的なものであった。具体的には「面白かった」「英語が好きになった」「聞き取れるようになった」「コミュニケーション力が身に付いた」「コミュニケーションを行う際に気を付けることや積極性を学べた」というものであった。学生にとって外国人講師の授業はそれ自体が新鮮であることに加えて、数年前から連続して同様の記述が一定数見られることから、当該教員の授業の質の高さに起因する部分が大きいと推測する。また、上記の記述は授業においてコミュニケーションを積極にとることや、英語を好きになってもらうよう工夫することの重要性を改めて認識させるものである。

その他の記述としては「英語系の授業で自己肯定感が上がる」というものがあった。これはある程度英語が得意な学生からの記述と思われるが、自己肯定感が学習者の英語学習における動機付けになることを示すものとして注目に値する。

一方で、「英語の授業の抽選に落ちたが、その後、他の外国語の授業が取れないのが意味分らない」という記述もあった。2020年度カリキュラムの2年生科目は3コース制になっており、いずれか一つを選択することになっている。そのためコースごとの履修希望者数が年ごとに異なる傾向があり、登録後に希望者が予定人数を超過した場合は抽選をせざるを得ないのが現状である。教育機会の保証という点で、希望したにも関わらず履修ができなという事態は避けるべきであり、改善に向けた検討が必要である。

四條畷については「英語リーディング1・2の教員の人柄が良かった」という記述があった一方で「英語に関する授業をもっと良い先生に担当してほしい」というものもあり、これらの相反する記述は担当する教員によって教育の質に差があることを示している。このような教員間における質のばらつきは、教育の質の保障という点で望ましい状況ではない。英語教育研究センターでは、新学期前の毎年2月に英語科目を担当する全教員を対象に教育の質の向上や情報交換を目的として、各担当科目の説明や上場実践に基づくFDを実施しているが、より一層の充実を図っていく必要がある。

3. 今後の展望

昨年は2024年度カリキュラムの1年目であった。基本的な理念は2020年度カリキュラムを踏襲し

ているが、105分授業や一部オンデマンド科目（資格対策英語）の導入など、異なる点もある。これらの評価については、対象学生が卒業後に回答するアンケートの評価を待つ必要がある。今後の英語教育研究センターの取り組みとしては、2028年度のカリキュラムに向けて、それまでのカリキュラムを検証し、進展するグローバル化の中で、大学生として求められる英語力の養成を目標としたカリキュラムを検討していきたい。

2024 年度卒業生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 6 日
 数理科学教育研究センター
 2024 年度主任 梶木屋 龍治

1. 設問[A]について

AS センターが主に関係する項目は 1～6 であると思われる。基礎専門科目として、数学と物理学の講義・演習と実験で重点を置いて教育している項目が 1～6 である。大学全体では「1 幅広い分野にわたる教養」(2023 年度の平均 3.9)が 2024 年度も 3.9 と昨年度比で変わらず高評価を維持できた。他の項目については、「2 専門的な知識・技術」(2023 年度 4.0→2024 年度 4.1)、「3 物事を論理的に考える力」(2023 年度 3.9→2024 年度 4.0)、「4 的確な判断力」(2023 年度 3.7→2024 年度 3.8)「5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力」(2023 年度 4.0→2024 年度 4.1)と 0.1 ポイント上昇している。これらの数値は AS センターが特に力を入れている数学・物理科目の基礎学力向上の取り組みの成果が表れているものと考えられる。

表1に学部ごとの伸びをまとめた。工学部はすべての項目において 0.1 または 0.2 ポイントの上昇である。情報通信工学部、総合情報学部は 0.1 ポイント上昇した項目がみられる。これらの結果から、これまでの我々の取り組みが実を結びつつあることを伺わせる。

表1
 学部ごとのポイントの伸び【2024 年度(2023 年度)Δ変化】

	工学部	情報通信工学部	医療健康科学部	総合情報学部
1 幅広い分野にわたる教養	4.0(3.9)Δ+0.1	3.9(3.9)Δ0	3.8(4.0)Δ-0.2	3.9(3.9)Δ0
2 専門的な知識・技術	4.1(4.0)Δ+0.1	4.1(4.1)Δ0	3.9(3.9)Δ0	4.1(4.1)Δ0
3 物事を論理的に考える力	4.0(3.8)Δ+0.2	4.0(3.9)Δ+0.1	3.8(3.9)Δ-0.1	4.0(3.9)Δ+0.1
4 的確な判断力	3.8(3.7)Δ+0.1	3.8(3.8)Δ0	3.7(3.8)Δ-0.1	3.7(3.8)Δ-0.1
5 知識やツールを組み合わせる課題に取り組む力	4.1(4.0)Δ+0.1	4.2(4.1) Δ+0.1	3.8(3.8)Δ0	4.2(4.1)Δ+0.1
6 考えていることを図解などで表現できる力	3.9(3.8)Δ+0.1	3.8(3.8)Δ0	3.5(3.6)Δ-0.1	3.7(3.7)Δ0

2. 設問[B]について

AS センターが関係する項目は 4 と 5 であり、大学全体では「4 基礎専門科目・専門科目(講義)」(2023 年度 3.9→2024 年度 4.0)、「5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)」(2023 年度 4.0→2024 年度 4.1)とどちらも 0.1 ポイント上昇している。[B]の平均が 3.8 であることから、相対的に良い評価を得ていると言える。表2に学部ごとの伸びをまとめた。工学部、情報通信工学部と総合情報学部ではポイントの伸びがみられる。

表2
 学部ごとのポイントの伸び【2024 年度(2023 年度)Δ変化】

	工学部	情報通信工学部	医療健康科学部	総合情報学部
4 基礎専門科目・専門科目(講義)	4.0(3.9)Δ+0.1	4.0(3.9)Δ+0.1	3.8(4.0)Δ-0.2	4.1(3.9)Δ+0.2
5 基礎専門科目・専門科目(実験・実習・演習など)	4.2(4.1)Δ+0.1	4.1(3.9) Δ+0.2	3.9(4.0)Δ-0.1	4.2(4.0)Δ+0.2

3. 自由記述について

AS センターに直接的に関係する内容は限られているが、授業に関する具体的な意見が出されており、授業改善への指針として貴重なものであるといえる。今後のカリキュラムマネジメントと各科目の講義へフィードバックをかけるために慎重な分析を進めたい。

(1) 数学系科目に関する意見として、「数学科教育法: 教職課程で教員免許を取得することができた。」、「代数学2: 3次方程式の解の公式を知れた。」、「卒研ゼミ: 分からない所を丁寧に教えてくれた。」、「代数学1: 扱っている分野が面白かった。」、「微分積分: 問題を解くのが楽しかった。」、「多変数の微積分・演習: 先生が面白かった。」、「ベクトルと行列: 役に立った。」、「基礎解析学 1 演習: 質問の対応がとても良かった。」といった専門の学びへつながる学習ができていることを評価する意見が見られた。

(2) 物理系科目に関する意見として、「物理学実験: レポートの書き方・データの取り方を学べた。」、「工学基礎実験: ラジオを作って面白かった。」、「物理学実験: 忙しかったが好きなので面白かった。レポートの知識を学ぶことができた。」、「物理学実験: とても分かりやすい先生でした。」等の意見があった。教育内容を好意的に評価する意見である。

4. まとめ

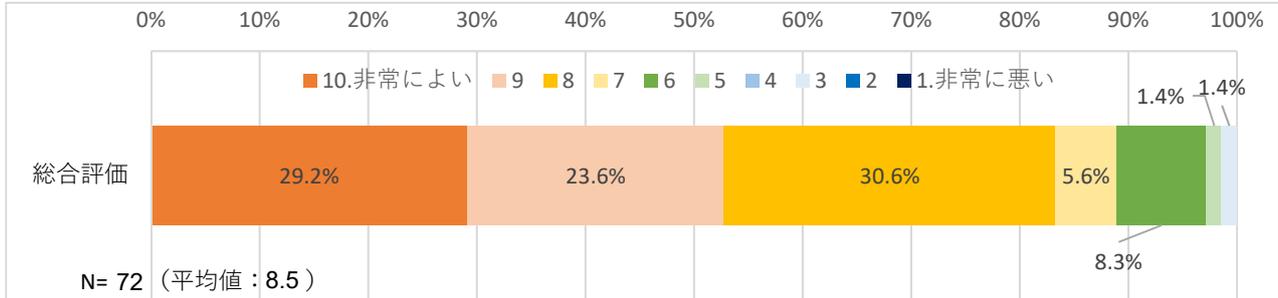
数理科学教育研究センターの専任教員・非常勤教員は、1～2 年次生の授業を数多く担当しており、今までに培ってきた授業の工夫やノウハウは蓄積され、これを共有してきている。数学、物理の講義、演習、実験は本学全体の様々な専門教育を行っていく上で基礎となる科目であり、非常に重要な科目である。数学、物理の講義・演習科目、実験科目を 1、2 年生のときにしっかり身につけることは、専門科目の理解と習熟のために必要なことである。数理科学教育研究センターでは、さらに授業のねらいや目的を明確にし、習熟度別クラスの編成、専門科目との連携を強化して、全学的な基礎教育の充実を目指している。また、時折発生する学生からの注文や意見に対しても迅速に対処できる体制を整えている。数理科学教育研究センターでは、入学時のプレースメントテストを実施して、習熟度別クラスによる授業運営を推し進めてきた。

今後も、数理科学教育研究センターとしての役割を果たせるよう、習熟度別クラス間の調整、基礎専門科目と専門科目の連携を深めていきたい。

2024年度 修了生満足度調査

大学院全体：集計結果

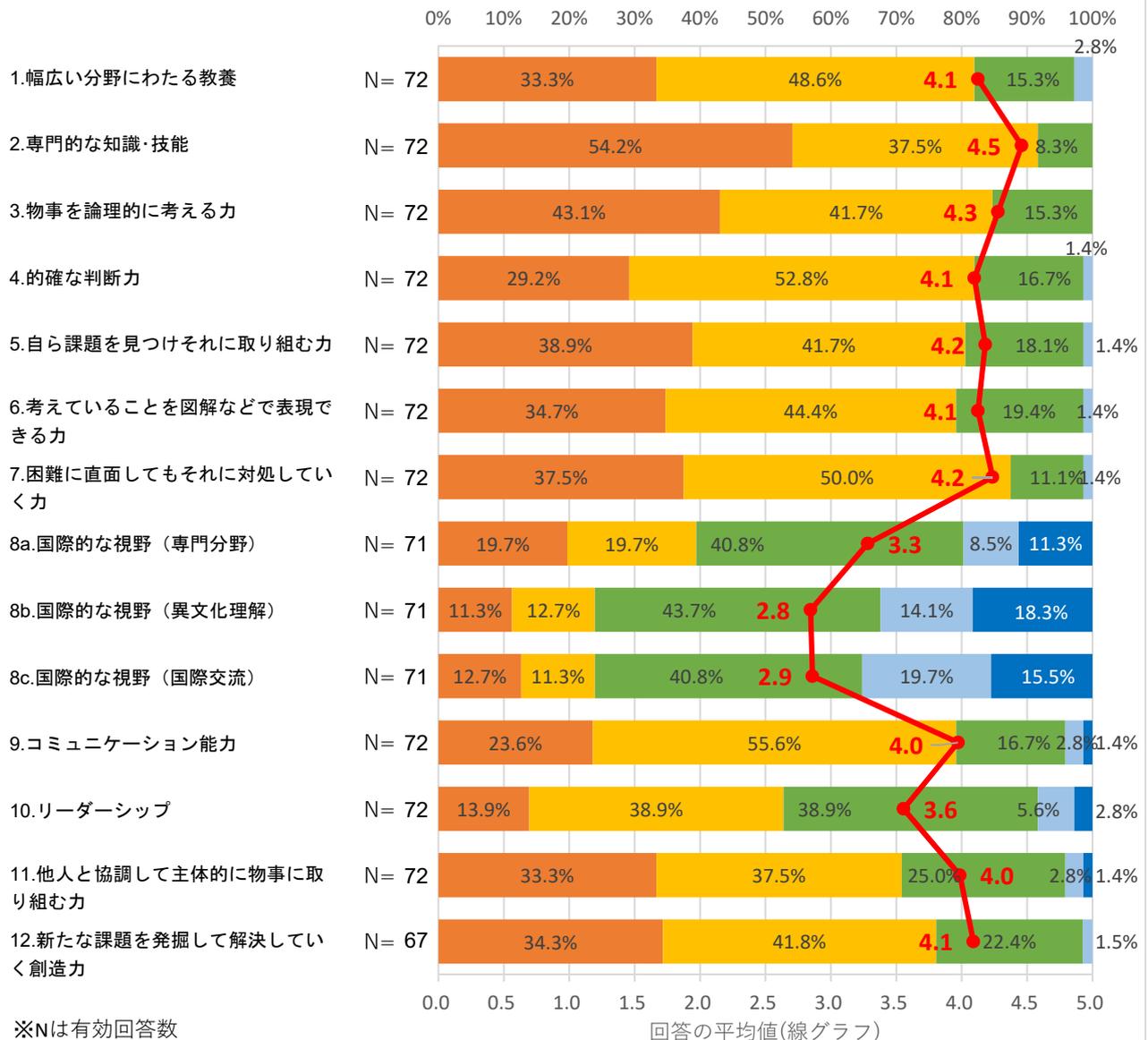
◆あなたが本学の大学院で経験した教育について全体として考えて、総合評価を1～10の10段階で評価してください。



◆本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか？

■5.十分獲得した ■4.ある程度獲得した ■3.どちらとも言えない ■2.あまり獲得していない ■1.獲得していない

選択肢別の割合(棒グラフ)



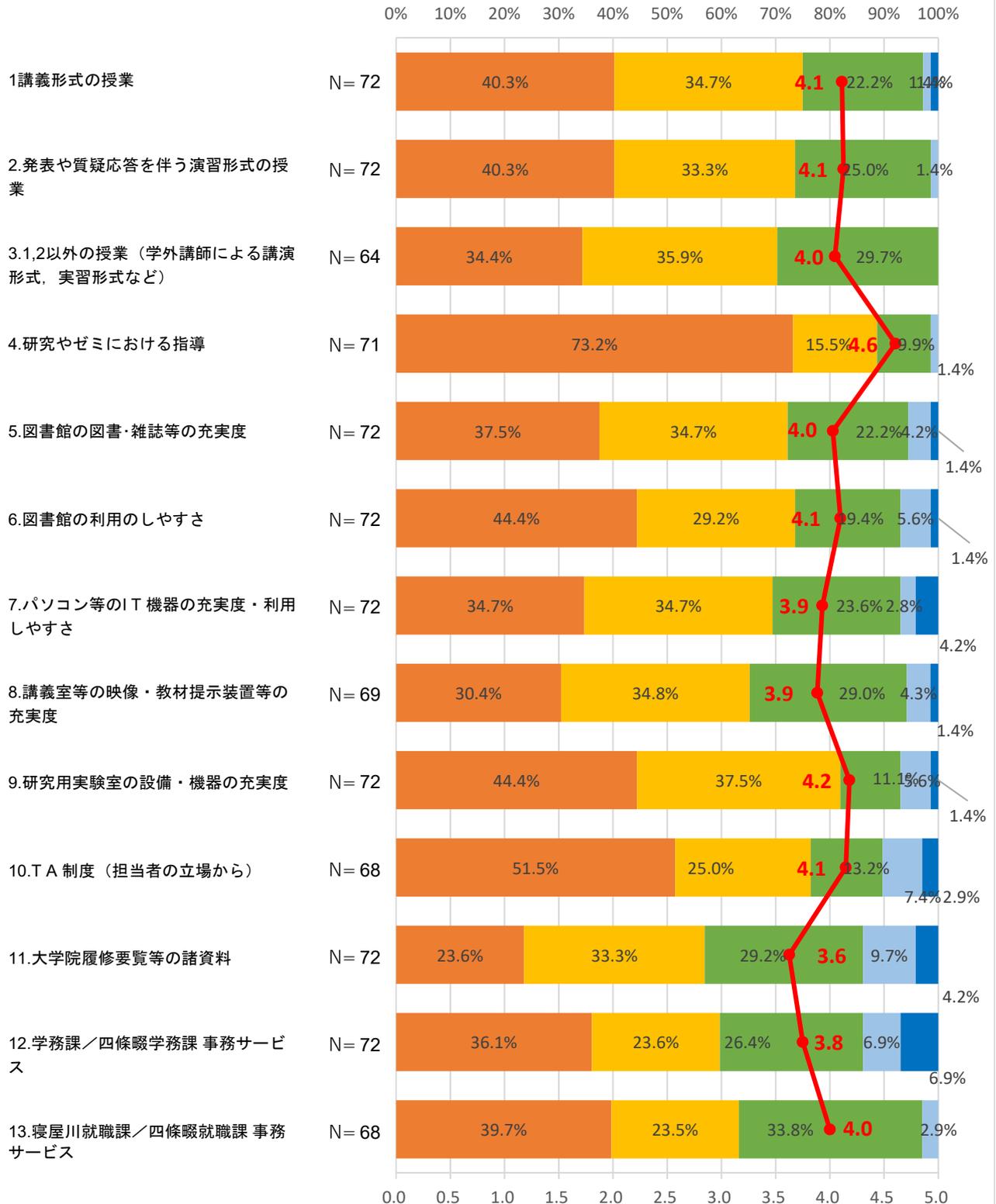
2024年度 修了生満足度調査

大学院全体：集計結果

◆本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて、全体的に評価してください。

■ 5.よかった ■ 4.ややよかった ■ 3.ふつう ■ 2.やや悪かった ■ 1.悪かった

選択肢別の割合(棒グラフ)



※Nは有効回答数

回答の平均値(線グラフ)

大学院

2024 年度

「修了生満足度調査結果の検討」

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 24 日
工学研究科先端理工学コース
2024 年度主任 安江 常夫

2024 年度は 11 名の院生が修士課程を修了し、修了生全員から満足度調査の回答があった。まず、総合評価については、大学院全体では 8.5 ポイントであるのに対し、本コースの修了生については 8.1 ポイントと、大学院全体よりも満足度が低い結果となった。2023 年度の 8.8、2022 年度の 8.2 と比較しても 2024 年度はやや低い評価とった。点数分布を見ると、総合評価 10 が 1 名、9 が 4 名、8 が 5 名となっているが、1 名だけが総合評価 3 としており、これが平均値を下げる結果となっている。ただ、自由記述を見てもこのような低い評価につながる事項は記載されておらず、低い点数が評価が高いと勘違いをしたのか、あるいは自由記述には表れていない何か本質的な不満があったのかについては明確ではない。

[A]の大学院で得た知識や能力に関する満足度については、2023 年度とほぼ同じような傾向となっており、[A]全体の平均点はやや上昇している。各項目を見ると、「国際的な視野」のうち「専門分野」に関するポイントが 2023 年度の 2.7 から 2024 年度は 3.6 と大きく上昇している。これは、国際会議での発表や、国際共同研究への参画などを積極的に行ってきた成果であると考えられる。これは院生にとって非常に重要な経験であるので、今後も国際的な視野を広げるべく努力を継続していく必要があると考えている。また、「リーダーシップ」についても 2023 年度の 3.0 から 2024 年度は 3.5 と大きく上昇している。これは学内外との共同研究に参加し、活発な議論を行うことで自分の研究に自信と誇りを持ち、リーダーシップが芽生えてきたことを反映していると考えられる。こうした研究活動も大切なものであるので、継続して取り組んでいきたい。

[B]の授業や設備・機器についての満足度に関しては、[B]全体で 2023 年度とほぼ同じ評価であった。個々の設問についても、ほぼ前年度と同じ傾向であるが、学務課・就職課の事務サービスが大きく評価を下げている。これについては、自由記述でも改善すべき点として何名もの修了生が取り上げている問題である。具体的にどのような点に不満を持ったのかの詳細は不明であるが、教員と事務部門との連携を密にとって、問題の解決をしていく必要がある。そのためには、学生の声をよく聞いて、ささいな問題であっても真摯に取り組んでいく必要があると痛感している。

自由記述においては、A 号館研究室の環境の悪さに関するものが多い。研究室の壁を低くして、他の研究室との交流を促進する効果を狙ったものではあるが、その反面で研究環境の劣化の可能性のあることは当初より指摘されてきたものである。実際に研究を行う院生の多くが、環境が悪いと感じていることは重大な問題であり、改善に向けた方策を考えていく必要がある。

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025年 6 月 13 日

工学研究科電子通信工学コース

2024 年度主任 海老原 聡

2024 年度修了生満足度調査の自由記述に基づき、検討結果を報告申し上げます。

良かった点

研究活動の指導と支援に関しては評価を受けており、今後も一層、力をいれていくべきである。以下はその一部の意見である。

「教員が熱心に指導してくれる。」

「学会活動はとても良い経験が得られ、たくさんの意見や知識が得られた。」

「学外の学会活動に参加できたことが良い経験を積む機会となり、知識を広めることとなった。」

改善すべき点

TA の報酬に関して以下の不満が述べられていた。2024年6月に工学研究科全コースの主任は協力して、この問題について院生からのアンケート調査を実施し、その結果を公開し、謝罪の言葉を、工学研究科教員を代表し研究科長から工学研究科院生全員宛てに 2024 年7月11日に送信している。しかしながら、この度の修了時点でも院生達の不満が残っていることがわかる。この件は、工学研究科長から学長や運営委員会へ報告されているはずである。

「十分な説明なく TA の給料を下げたのは納得できなかった。」

「TA 制度について、説明なく時給が下がった理由が分からなかった。コマ給だからという理由は時給が下がる理由にならないと感じる。」

「TA の報酬の仕組みはあまりよくないと思った。時給単位での給与が実質下がったのに連絡が何もなかったことには驚いた。」

以下のように、同じコース内での交流の要望があった。昨年から教員どうしの交流の会も持たれており、次は院生へ拡充していくことも考えられる。

「他研究室の院生の交流の場があった方が良いと思う。」

以下のように、授業の履修システムや周知に関して要望があった。ちょうど、この年に修了した院生はコースの選択必修科目が変更された後の最初の学年であったので、これも影響している可能性がある。

「授業を2年に一回ではなく、毎年行っていただけると取りたい授業を取ることができます。」

「制度や学則が分かりにくかったので改善すべきであると思う。」

以下のように、出張旅費は一時でも院生が立て替えると負担になるため、これについては以後改善が必要かもしれない。

「学会発表の際に、宿泊費もしくは交通費だけでも先に支援がほしかった。後援会の存在が大きいので

で、その周辺の支援の強化を。」

A号館研究室に関する要望は、昨年につき以下の通りでている。本件については、教職員側は膨大な議論をしている。根本的な解決には、新たな研究棟を建設するしか手立てがないように思える。

「フリースペースや研究室ごとのエリアの区分としてパーティションなどを立てないと、周囲の音が気になり研究に集中できなかったため、何かしら対策してほしいと思う。」

「院生用の個室(研究室ごとなど)は欲しい。狭い部屋にすし詰め状態になってしまうと集中しづらい。」

以上

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年6月30日

工学研究科制御機械工学コース

2024 年度主任 阿南 景子

2024 年度修了生の総合評価は、平均 8.2 点(10 点満点、N=23)であった。これは、2023 年度の平均 7.9 点と比べて 0.3 ポイントの上昇である。評価点分布を見ると、8 点以上が 18 名、7 点以下が 5 名であった。4 点以下という低い評価点をつけた人はおらず、多くの学生が大学院での経験はおおむねよかったと評価していることが分かる。

以下、項目別に詳しく見ていく。

項目 A:「獲得した知識・能力」

項目 A の平均点は 3.7 点(5 点満点)で、昨年度の 3.7 点と同じであった。専門的な知識・技能の獲得、的確な判断力、国際的な視野(異文化理解)、コミュニケーション能力、他人と強調して取り組む力については、昨年度より 0.2 ポイント以上、上回っていた。コミュニケーション能力は 0.3 ポイント上昇しており、考えていることを図解などで表現できる力も 0.1 ポイント上昇している。研究活動を通じ、多くの学生が、考えを伝える力を身に付けたことがうかがえる。一方、論理的に考える力、困難に対処していく力、リーダーシップについては 0.1~0.2 ポイント低下しており、昨今のやや受け身になりがちな学生の動向を示しているものと考えられる。国際的な視野に関する項目以外で評価 1 をつけている人はおらず、修了生が大学院生活を通じて自らの成長を感じているという点は、評価できる結果といえる。自由記述欄を見ると、「学会発表」や「学外活動」やそれに向けたディスカッション等を通じて多くの経験を積んだことが分かった。

項目 B「授業科目群や設備・機器」

項目 B の平均点は 4.1 点(5 点満点)で、昨年度の 3.9 点より 0.1 ポイント上昇した。各細目を見ると、大学院履修要覧等の諸資料、学務課事務サービスの評価点が 3.6 以下と低くなっている。いずれも学務課等の事務サービスに係る内容である。自由記述欄からピックアップすると、「履修システム」、「4 限目が終わった時に学務課が閉まっている」、「学務課からの連絡が遅い」、「TA の給料の説明不足」等の意見が見られた。大学院生の人数は学部生よりも極端に少ないため、学部生と同等のサービスの提供は難しいが、履修システムの改善等については学務課には検討頂きたい。

加工センターが充実している、加工センターの職員に設計から製造まで相談に乗っていただき大変役に立った、等の意見が見られた。職員の協力に感謝する。

昨年度意見のあった設備の老朽化に関する内容については、本年度の自由記述欄では確認できなかった。しかしながら、「研究室が狭く、作業スペースが少ない」、「院生の多い研究室では、学部生と院生が A 号館で活動できない」、「隣の研究室の音が筒抜け」、「研究スペースが開放的で落ち着かない、研究に集中できない」、「誰でも入れるので研究室のセキュリティが問題」等、A 号館の研究室に対する意見が多く見られた。大学院生にとって研究環境の維持や静粛性はたいへん重要な課題であるので、今後、運用方法も含め、改善に向けた検討が必要である。

その他、全体的な意見として、学部低年次生に研究室や院生の研究を見てもらい、大学院進学について考える機会を持つことが必要、といった意見が見られた。これについては学部でも検討し、進学者を増やす取り組みをすることが望まれる。研究環境に関する意見については、大学院の活性化や研究競争力の向上のためにも重要な課題であり、今後、継続的な改善検討が必要である。

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 27 日

大学院工学研究科工学専攻情報工学コース

2024 年度主任 来海 暁

今年度の当コースの総合評価(9.2 点)は、過去 5 年間(2019 年度:9.0, 2020 年度:7.8, 2021 年度:9.0, 2022 年度:7.3, 2023 年度:8.4)と比較すると、最も高い値となった。今年度の修了生数は 5 名であり、2020 年からの 4 年間(各 6, 7, 9, 11 名)に比べて標本数が少ないことから、評価点自体の単純な比較は難しい。ただ、彼らは学部 2 年生に進級した直後から卒業まで COVID-19 パンデミックによるさまざまな制約を被ってきたのに対し、2023 年 4 月に大学院に進学した直後に COVID-19 が 5 類に移行し、それまでの制約が取り払われ活動の幅が広がったので、それが高評価となった要因の一つであることは想像に難くない。

知識・能力の獲得に関しては、すべての項目で評価点が昨年度を上回っている。中でも、「国際的な視野」では、昨年度が 3 点台であったのに対し、今年度は 4 点を超えているのが目を引く。これはやはり COVID-19 の 5 類移行により国際会議での発表のために海外出張する機会が増加したことが大きく影響していると思われる。また「コミュニケーション能力」や「リーダーシップ」においても、昨年度 3 点台であったのが 4 点を上回っている。これについても、5 類移行により学部で面接授業が増加したり卒業研究生の研究室への登校機会が増加したりしたことにより、大学院生が TA あるいは研究室の上級生として学部生を指導する機会が増えたことによるものと考えられる。その他の項目は主に授業や研究に関連しているが、これらは昨年度とほぼ同様の形態で行われたにもかかわらず、対応する評価点が向上している。前述の「国際的な視野」、「コミュニケーション能力」、「リーダーシップ」等の面で学生の意欲が促進され、それが授業や研究においても好循環をもたらしたと考えられる。

一方、授業科目、設備・機器、サービスに関しては、評価点が昨年度と同程度か一部には低下している項目も見られる。授業や研究指導、および設備・機器に関する項目では評価点が 4 点以上であり、少なくとも昨年度と同程度となっている。教室での授業用設備が例年の水準で維持されており、各教員は研究指導や授業の内容を改善する努力を毎年継続していることが反映されているものと思われる。これに対し、図書館や就職部に対しては昨年度よりも評価点が下がり、3 点台にまで至っている。自由記述には書かれていないが、希望する図書が収蔵されていなかった、希望する形での就職活動の支援が受けられなかった、などの不満があったのではないかと推測される。

特に気になるのは、TA 報酬が昨年度から実質的に減額されたことについて、自由記述に苦情が見られるだけでなく、評価点が下がっていることからそれが窺える点である。大学院生の中には家計に対する学費の負担が大きい家庭も多く、そこに物価高騰が追い打ちをかけている中での TA 報酬の減額はやはり学業継続上の重大な問題であり、それが如実に反映されている。大学の目標として大学院の強化を掲げるからには、より多くの大学院生を募集するために経済的支援を充実させる施策を考えていく必要がある。

また、自由記述には大学院生と教員との間の交流が少ないという指摘が見られる。各教員は大学院生に対して日々親身な指導を心掛けてはいると思われるが、学生はそれでも物足りなく感じているのかもしれない。学生の気質が時代とともに少しずつ変わっていく中で、大学院生がこの大切な 2 年間で充実して今後の人生への糧となるように過ごすことができるよう、我々教員は不断の努力を惜しまぬようにしなければならない。

最後に、今回の満足度調査には表れていないが、A 号館研究室の狭さや通路からの視線に対する不満は昨年度も折に触れ聞こえていた。狭さについては単に人数分の机や座席を適当な場所に確保すれば解決できるものではない。学生から見た研究室の魅力の一つは、人が常に入れ替わる授業の教室と異なり、研究室がまとまった固有の空間を持ち、その中で研究生が互いに机を並べて日々議論しながら切磋琢磨し合う環境にある。研究室間や学科・専攻間で風通し良く交流できることを目指した A 号館の構造の下で、大学院生がさらに増えても研究室で居心地よく研究活動を営むことのできる環境が提供できるように、大学として知恵を絞っていかねばならないと考える。

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 30 日

工学研究科建築学コース

2024 年度主任 辻 聖晃

1. 「獲得できた知識や能力」について

概ね 2023 年度を上回っており、教育改善の成果が表れたとみられるが、学生の個人差によるところもあるかと思われるので、今後も、大学院生が本学らしい知識と能力を獲得できるように、教育内容の工夫と改善に努めたい。

項目ごとにみると、依然として「国際的な視野」の点数が他の項目に比べて 1 ポイント以上低い。本学を修了した大学院生のほとんどが国内の企業に就職し、その顧客も国内に留まることが多いため、国際的な視野の獲得を目指した教育を最優先とできないことにはやむを得ない点があるとはいえ、最先端の技術や情報の獲得には国際的な視野が必須であり、各授業や研究ゼミにおいて、国際的な視野を意識した教育のいっそうの拡充をはかっていきたい。

2. 「授業科目や設備」について

概ね 2023 年度を上回っており、学生の側に立った授業や設備整備が行われているとみることができるが、おそらく同一の学生が、飛び抜けて低い評価点を回答しており、「全員の満足度が高い」授業や設備にはなっていなかったことが残念である。建築学コースでは、「全学生を全教員で教育する」方針をとっており、指導教員以外の教員への相談や研究上の質問も受け付けているが、学生の悩みや不満をコースとして十分に汲み取れるよう、今後も、全学生を全教育で教育する方針の徹底を図りたい。

自由記述にあった「A 号館に壁を作るべき」との意見は、学部学生からも同様の声を多く聞いており、大学全体の課題として取り組むべきである。現状のオープンなスペースでは、100 人中 99 人がルールを守った節度のある使い方をしていても、1 人の迷惑行為によって多くの学生や教員の研究活動に支障が生じてしまう。視線の開放感確保しつつ、音や匂いを遮断できるような方法(例えばガラスの仮設間仕切り)を検討すべきである。

以上

2024年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025年 7月 7日

総合情報学研究科デジタルアート・アニメーション学コース

2024年度主任 山路 敦司

2024年度修了生満足度調査の集計結果について、前年度と比較して概ね満足度が維持されつつも評価自体が向上しているように見受けられる。[A]および[B]については前年度と同じ点数でありながらも、総合評価[C]については1.0増となり、前年度からの改善の成果が現れているのではないかと考える。

自由記述において、コースで改善できる指摘としては、学生数の少なさから来る問題が浮かび上がっていると考える。そのためには、大学院と研究室のあり方として、各研究室における学部生との縦関係を充実させる必要があるが、現状うまくいっていない可能性がある。また、他研究室間の交流についても希薄であることが考えられる。これについては副査の教員を副指導教員的な役割で主査によるゼミと並行して指導することをコースで進めてはいるものの、実態としてはあまり有機的な指導連携に繋がっていない可能性がある。

学生間の交流の活性化については2024年度の活動計画書にも明記しており、昨年度から新たな機会を設定する試みが行われているため、改善の見込みは期待できると考える。また、研究室を横断する指導についても、学生状況を観察しながら積極的に進めたい。

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年 6 月 16 日
大学院総合情報学研究科デジタルゲーム学コース
2025 年度主任 和田 真一

本報告書は、2024 年度修了生(5 名)を対象に実施した満足度調査の集計結果をもとに、現状の教育・研究指導・設備環境に対する学生の評価を分析し、今後の改善の方向性を検討するものである。

まず、知識や能力の獲得に関する質問[A]の平均値は 3.8 であり、昨年度(4.0)と比べやや低下したものの、過去数年の平均と比較しても大きな偏りは見られない。特に「専門的な知識・技能」は 4.6 と最も高く評価されており、研究室における専門的指導が学生の成長に資する形で機能していることが窺える。一方、「困難に対処する力」(3.6)、「国際的な視野(国際交流)」に関する設問(3.2)など、一部の項目ではやや低い評価が見られ、今後の育成支援の重点化が必要である。

大学院教育・設備に関する質問[B]の平均は 4.7 と非常に高く、特に「研究やゼミにおける指導」は 5.0 の満点を記録した。授業科目についても「講義形式の授業」および「演習形式の授業」がいずれも 4.8 と高評価を得ており、教育内容への満足度の高さが示されている。施設面では、例年相対的に低評価が続いていた図書館に関しても改善が見られ、「図書・雑誌等の充実度」は 4.6、「利用しやすさ」は 4.4 と、いずれも前年を上回る評価となった。電子資料の拡充や館内導線の見直しといった施策が学生の利便性向上に寄与しているものと考えられる。

総合評価[C]では、10 点満点中 9.4 という非常に高い数値が記録された。これは過去 4 年間で最も高い水準であり、本研究科の教育・研究環境が一定の成熟と信頼を得ていることを示している。

全体として、学生の満足度は高水準で安定しており、特に教員の指導力や授業設計の成果が際立っていることが確認できた。一方で、グローバルな視点を身につけるための取り組みや、より多様な学修スタイルへの対応など、引き続き注視すべき課題も残されている。今後も教育環境の質を高め、学生の多様な成長を支援できるよう取り組みを進めていきたい。

以上

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 1 日
総合情報学研究科コンピュータサイエンスコース
2024 年度主任 渡邊 郁

本コースの総合評価の平均値は、2021→2022→2023→2024 年度で 7.3→7.3→7.7→8.7 と推移しており、今年度は大幅に上昇している。一方、大学院全体としては、8.1→8.1→8.1→8.5 と推移しており、本コースは大学全体の評価を超えており十分といえる。設問[A]の平均値は大学全体(3.9)同程度(3.9)であり、設問[B]の平均値は大学全体(4.0)より若干上回っている(4.2)。

設問[A]「本学での大学院生活をとおして、あなたは次のような知識や能力などをどの程度獲得したと思いますか?」については、全項目の平均値は、2021→2022→2023→2024年度で 3.8→3.5→4.2→3.9 と推移しており、昨年度より低下している。他の項目に比べると、「8 国際的な視野」の評価が低く(3.0, 3.0, 3.0)、これは例年の傾向であり、本コースの今後の重要な課題である。また、「1 幅広い分野にわたる教養」の平均値は(3.5)から(4.0)に上昇している。なお、これらの設問の自由記述の回答はなかった。

設問[B]「本学での大学院教育を振り返り、以下の授業科目群や設備・機器などについて全体的に評価してください。」については、全項目の平均値は、2021→2022→2023→2024年度で 3.8→3.5→3.8→4.2 と推移しており、今年度は大幅に上昇した。2023年度からの上昇の大きい項目は、「12 学務課／四條畷学務課 事務サービス」(3.0→4.3)であり、学務課の改善努力の結果と思われる。また「3 図書館の図書・雑誌等の充実度」(3.5→4.3)であるが、実際の図書館の蔵書状況等はあまり変化していないと思われるが理由は不明である。

自由記述は回答が少なかったものの肯定的な内容が多かったが、AI の授業を入れるよう改善を求める記述があった。大学に長く在籍した修了生の声にはしっかりと耳を傾ける必要がある。

2024 年度修了生満足度調査結果検討報告書

2025 年 7 月 17 日

医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻

2024 年度主任 田中 則子

設問[A]本学での大学院生活を通して獲得した知識や能力については、項目1～7と項目9「コミュニケーション能力」において4.0以上と高い結果であった。一方、特に低値を示した項目は、「8 国際的な視野」であった。その細目の「a 国際的な視野(専門分野)」「b 国際的な視野(異文化理解)」「c 国際的な視野(国際交流)」は獲得度が 2.3～2.7 となっており、昨年度の本専攻、および今年度の大学院全体と比較しても低い。各細目ともに 2～3 名の学生が一番低い獲得度である「獲得していない」を選んでいて、今後、国際的な情報や活動に参加できる機会をさらに増やす工夫が必要である。まずは、教員の研究紹介の際に、「国際学会参加のすすめ」につながるような、学会の様子や興味深いエピソードなどをあわせて紹介するところから始めていきたい。

設問[B]本学での大学院教育「1 講義形式の授業」「2 発表や質疑応答を伴う演習形式の授業」「4 研究やゼミにおける指導」については、4.0～4.8 と高い評価であり、教員が熱心に指導にあたってきた成果であると考えられた。一方、評価が 3 未満の回答が複数あった項目は、「6 図書館の利用しやすさ」「11 大学院履修要覧などの諸資料」であった。年度の半ばに、現役学生を対象として、不便さを感じている内容について情報収集する機会を持って、改善にむけた検討をすすめたい。

設問 [C]本学での大学院教育に対する総合評価は 9.0 ポイントで、昨年度よりも高値を示していた。設問[A][B]では昨年度よりも獲得度や評価が低かったが、総合評価では昨年度を上回る結果となっていた。この結果は、自由記述に記載されていたように、研究室での活動や院ゼミ、学会参加等を通じての学生の学びが非常に大きく、充実していたためと考えられた。今後も、これらの活動を継続したうえで、自由記載欄にあがっていた「学部生と院生の交流機会」の実現にむけて、具体的な計画を進めていきたい。

■参考

当報告書と合わせ下記の資料が参考となることを、添えておきます。

『教育基本3方針（ポリシー）』

【大学】 <https://www.osakac.ac.jp/about/policy/faculty/>

【大学院】 <https://www.osakac.ac.jp/about/policy/graduate/>

2025年7月

教育開発推進センター

寝屋川キャンパスA号館1F

〒572-8530 寝屋川市初町18-8・内線：3129